

藤岡 皆様、こんにちは。本日は「フォーラム『みどりのニッポン再生』地方からの提言」にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。パネルディスカッションでの討論の前に、このフォーラムにふさわしいご講演をお願いすることにしました。演題は「森の物語」です。お話は、明治大学理工学部教授で著作活動やテレビ番組の出演などでもおなじみの北野大さんです。皆様既にご存じかとは思いますが、映画監督北野武様のお兄様でいらっしゃいます。申し遅れましたが、私は本日、このフォーラムの司会をさせていただきます藤岡英里と申します。よろしくお願い致します。（拍手）ありがとうございます。（拍手）それでは北野さん、お待たせ致しました。どうぞお入りください。お願い致します。（拍手）

基調講演 ～森の物語～

北野 どうも皆さん、こんにちは。ただいま、弟のことまでご紹介ありがとうございます。あそこまでいただけるなら、大学と大学院を優秀な成績をもって卒業したと一言付け加えていただけると完璧かと思うのですが。冗談ですから。

今日はこのあとパネルディスカッションがございます。約2時間と伺っています。テレビの放映もあります。そうしますと、寝ていると全国にその姿が映ります。

このあとのパネルディスカッションの2時間のために体力を養っていただくということで寝ていただいても結構ですので。いびきだけはちょっとご遠慮いただきたいと思うのですが。

ただそうは言いつつも、私もここへ出てきてお話をするのに、みんな寝ていられたらやはり正直言って嫌になってしまうのですよね、はっきり言いまして。ですから、ちょっと今日は本を持って来ました。今、2時5分でそんなに眠くないと思うんですが、本を持って来ました。1冊は「北野家の訓え」と生意気なタイトルですよね。「北野家」なんて家じゃないんですけれども、大した家じゃないんですが、要するにおふくろが私とか弟をどう育てたかということです。一言で言えば「謙虚な人間になれ」とか「威張ってはいけない」、「馬鹿なやつほど威張るんだ」とそういうことですね。そういうおふくろが教えてくれたことを書いています。

この前、あるところでそんな話ししていたら、「先生、よくまともな人間になりましたね」と言うんですよ。「あんな家庭に育ったら、普通はぐれるのが当たり前なんですけど、よくまともになりましたね」と言われて。余程ひどい家と思われているようなんですけれどもね。それも1人の母親のおかげですと申し上げたんですが。

2冊目は「『できる子ども』は環境で決まる」と言う。この6名は見えますか。影山先生なんか。今、立命館の教授になっていますね。岡山の土堂小学校

の先生です。あの百ます計算の先生です。エッセンスだけ言いますと、やはり今の子供はほめて育てよう。ほめないと駄目だということのようですね。昔は叱ってけなして反発力という。今はほめるという。

私の好きな長嶋さんと言う、10年に1人の逸材と。巨人に入る選手は全部10年に1人の逸材です。その10年に1人が何十人というというのが巨人軍なんですけれどね。まあ今シーズンはちょっと中日に譲りましたけれども。

三つ目は私の専門の環境の、これは環境再生機構で監修したんですけれども、データベースです。ここにCDが入っています。

そんなことで3冊本を持って参りました。今からあと30分ぐらいしかないんですが、お話をしながら質問をさせていただきます。もしよろしかったら手を挙げていただいて、正解の方にお持ち帰りいただくという。いかにもものを釣っているという感じなんです。

なぜ私がそんなに「起きていてくれ」とこだわるかという、この前、ある有名なお医者さんに話を聞いたんです。その人がおっしゃるには、せっかくこういうふう勉強しようとか、ある意欲を持ってこういう講演会なり講習会に来ますね。ところが今日もクッションもいいでしょうね。エアコンもよく効いている。時間が2時。もう眠くなってしまふ。たまにですが、最初から最後までずっと寝に来たんじゃないかという人がいるようです。それはそれでいいですよ。でもその先生がおっしゃるには、最初から最後までずっと寝ていると、将来間違いなく寝たきりになるという。

いや、それはお医者様がおっしゃったんですよ。私は工学部だからよく分かりませんが、とにかく寝たきりになる。私はそれを信じています。そういう意味で、せっかく勉強しに来られて寝たきりになることを保証して帰っていただくのは大変申し訳ないので、そんなことで本を持って来ました。生意気に全部サインをしまったので。書いていますので、もう古本屋に売れないと思えますけれども。じゃあ、いきましょか。

冷戦構造、ソ連が崩壊して20年以上経ちましたけれども、冷戦構造が崩壊したあとからかなり地球環境問題というものが認識されてきたと思います。実は温暖化などというのも1800年代から、ファント・ホフとかアレニウスと言う学者が唱えていたんですけれども、ほとんど注目を浴びなかったわけです。冷戦構造が崩壊してからマスコミなども地球環境問題というふうになりました。これは分かりますよね。環境も大事だけれども、もっとも大事なのは国の安全保障だと。そういうことでやはり、まず、いかに国の安全保障をやるかということで、環境問題は二の次だったわけです。それで、うまくソ連が崩壊してくれて冷戦がなくなりました。そのころから地球環境問題というものが非常に注目されるようになりました。

ちょっと復習です。大きく二つに分けます。われわれ先進国に起因する環境問題というのは、温暖化とか酸性雨とかオゾン層破壊です。要するに高度な経済活動に伴って生ずる環境問題なわけです。

一方途上国です。今「途上国」と言わないと怒られてしまいます。テレビで

は、発展途上国と言わないと怒られてしまいます。昔は「後進国」などと言ってだぶ怒られたんですけれども、今は途上国です。途上国に起因する環境問題というのは、森林破壊であり森林破壊の結果として砂漠化であり、その結果として野生生物の減少となるわけです。

先進国の温暖化なりオゾン層破壊というのは、発展していく工業の結果なつたのです。では、途上国の森林破壊は何かというと、人口増加でしょうね。圧倒的に途上国は増えています。日本なんかいよいよ人口が減ってきました。ですから今日は行政の方もいらっしゃると思うけれども、これまでの日本というのは、増える人口にどう対処するかということですよ。増える人口にどう国を造っていくのかというのがこれまでの日本の行政だったわけです。

しかし今後は、減る人口に対して国をどうするんだという、全く違うパラダイムになるわけです。例えば、途上国の方を労働力として受け入れるのかとか、いろいろあります。そういうことで、減る人口に対してどうしていくかというのが問われるのですが、ただ世界全体で見れば、途上国中心に年間8千万、9千万の人口が増えているわけです。それがやはり森林破壊しているという話なんです。

ですから森林破壊、いわゆる環境破壊の話は最近の話かというふうに思うかもしれませんが。しかし歴史的に見ると、われわれは有史以前から森林破壊をやっているのです。例えば、シュメール文明がございますね。最近、世界史を勉強していない高校生が随分いるようですが、シュメールといっても区別がつかないかもしれません。これはチグリス・ユーフラテス川の流域です。シュメール文明、紀元前3600年ぐらいです。そこで人口が増えてきた。当時あそこは乾燥地帯なので、灌漑、水をどんどんくみ上げて灌漑したようです。それに塩類が入っていて結局作物が取れなくなってきた、最終的には人口が減っていた。

もう少し新しくなると、紀元前1600年ぐらいがギリシャのペロポネソス半島です。あそこにミケーネ文明というのがございます。これも同じく人口が増えてきた。そして人口が増えると当然食糧。従って森林を破壊していく。エネルギーが必要、森林を破壊していく。更に陶器ですね、焼き物。焼き物を作るのでやはり燃料が要る。森林破壊していくということですね。そんなことで森林破壊していきます。

そうすると表面の土壌が流れてしまって、結果としては食糧が不足してくる、そして健康状態が悪くなる、疫病がはやってくる、人口減少してくる、文明が崩壊するというそういうケースですね。まだまだいっぱい例があります。

中世。ヨーロッパでペストなどがはやっていますね。ネズミが媒介します。なぜそんなにペストがはやったかということ、結局当時は木炭を使って製鉄したわけです。そのあとにコークス製鉄です。石炭からコークスを使って還元しましたけれども、当時は木炭です。従ってどんどん木を切ったわけです。そうすると、ネズミを食べる小動物がいなくなってしまうわけです。それでネズミが大増殖してペストを蔓延させたという、これも一つの例です。

それからもっと言うとイースター島があります。私はまだ行っていません。死ぬまでに1回行ってみたいんですが、2週間ぐらいかかると聞いています。南にぐるぐる回って行くか、チリから行くかですね。大体チリの西3千キロと言っています。周囲には人の住む島がないという。あそこでモアイ像というのが600体ぐらいあって、300体ぐらいが製作途中だったという話がありますね。

あそこも結局、東南アジア、サモア人などが移住したようで。彼らは食料としてサツマイモと鳥を食べていたようです。従って食糧確保のために時間が要らないわけです。鳥なんて放っておけば地鳥で適当に虫をついばんでいる。サツマイモを植えておけばなってしまうわけです。時間が余ってしまう。それで結局彼らは宗教に入ったわけですね。アフというものを作って、集落ごとに競ってモアイ像を作っていたという。なかなかユニークな顔していますね。日本人の俳優さんで阿藤快と言う人をご存じですか。よく似ているんです、彼にね。彼、モアイ、サモアの出身かなと思ったけれども、怒られてしまうけれども。何かそういうものを作りました。

ちなみにモアイ像をどうやって立てたかご存じですか。大体数メートルあるようですね。大体数十トンと言いますね。それをどうやって立てたか。最近の修復は、日本のメーカーがクレーン車などを使ってちゃんとお手伝い致したけれども、当時、そんなクレーン車もないからどうやって立てたか。引っ張っても駄目ですよ。たまにそういういい番組をうちの弟がやります。昔は彼の番組は子供に見せたくない、そういう番組が多かったんですけど、最近子供と一緒に見たいという番組を彼がやるようになって。彼も年を取った一つの証拠なんです。

一つの説としては、こういうふうですね。こういうふうここに削っておくようですね。ころに乗せてモアイ像をこういうふう。こう来て、頭がこう来て。こう来てこう持って行って、こういうふうにとすようですね。で、モアイ像をこう立てる。そうしたらこちらの土を削ってしまう。それで、立てられるという。こう行って、こう落として、こちらの土を削ってしまうという一つの説です。私も「ああ、そうですか」と言うしかないんですけど。結局彼らはこういうものを作っていたんです。

当時は河口に植物の化石、要するに花粉が残っているのです。それを調べると、イースター島というのは、高い木が相当いっぱい生えたすごい緑の島だったようですね。ところが、オランダ人が行った時には木が1本もなかったというんです。うそみたいな話ですよ。木が1本もなかった。そこまで徹底的に木を使ってしまった。もちろん食糧のため、それから舟ですね、カヌーを造るため。それから網を作るため、燃料のため、そしてモアイ像を運ぶのでころにするためということでどんどん木を切ってしまった。最後はペルーに滅ぼされて文明が滅びてしまったとありますね。

そうすると今いくつか、シュメールとかミケーネとか中世ヨーロッパとか、それからイースター島の例を簡単に申し上げたんですが、共通しているのは何

かということ、まず人口が増える、人口増加ですね。それによって食糧、エネルギーが必要になります。従って森林を破壊します。人口増加、森林破壊。そうすると表面土壌が流れてくる。それによって収量が落ちる、栄養不足に陥る、疫病が発生する、人口が減って文明が崩壊するというこれが共通のパターンです。そうすると今翻って、われわれの今現在の世界を見るとどうでしょうか。途上国でかなりそういう傾向がありますね。どんどん人口が増えている。そして森林を破壊しているという。今、幸いにいい薬もありますから、まだ疫病で文明崩壊までいきませんが。

われわれやはりこういう意味で、歴史に学ぶということを忘れてはいけないと思うんです。そんなことで、最初は簡単に森林破壊と文明崩壊ですね。森林破壊というものが最終的には文明崩壊につながっているんだということを申し上げました。ですから、いかに森林というものが大事なものであるかということが分かると思うんです。

二つ目は森林の効用について。このあとパネルでまた専門家からいろいろ話があるのですが、森林の効用についてちょっと復習してみましよう。森林がどういう役割を持っているか。どうでしょうか。そこの方。本がありますので。何かいかにももので釣っているみたいですね。森林の効用、どうでしょう。森林の最も大事な役割は何でしょうかね。どうぞ。酸素の供給。はい。この環境の本でいいですか。これを差し上げます。どうぞ。最初に答えてくれた方なので。ありがとうございます。文科省のタウンミーティングですと、内閣府のタウンミーティングだと、ちゃんとキックオフする人を指名しておいて、質問も教えておいて、私が格好良く答えるというのがタウンミーティングですが、ここはその予算がないので、そういう一切のやらせはありません。全く私は初めてでびっくりしたんです。酸素の効用ですね。いろいろあります。

資源として考えましょうか。資源の供給基地といたらいいでしょうか。資源の供給というふうに考えましょうか。例えばおっしゃってくれたように酸素ですね。O₂などこう。これ書くと一応私が化学の先生というのを分かってくれますでしょうか。そうでないと何かタレントが先生をやっているみたいなことを最近言われるんですよ。冗談じゃないと。私は、先生がタレントやっているんだと言うんですけれども。走りは、元の慶應教授の池田弥三郎先生をご存じですか。粹な方だったですよ。池田先生ね。僕はあの方が目標なんです。江戸っ子のね。余計な話ですけども。

酸素ですね。それから何がありますでしょうか。あとは木材ですね。まあ言うまでもないですけども。木材の供給なんてありますね。更に木材****に伴って製油、テルペンなどという油も取れるとか。いろいろなことがあります。それからそれ以外の役割として何があるかということ、よく「緑のダム」という言い方をします。ダム反対の方はよく「ダムはムダ」と書いて、「ダムはムダ」「ダムはムダ」など言っている人がいますけれどね。はっきり言って私はそう思わないです。ダムというものは太陽エネルギーの一時貯蔵場所だと私は言う。

太陽という熱エネルギーによって蒸発して雨が降って、位置のエネルギーとしてダムにためてあるんだと。その位置のエネルギーを落とせばその位置のエネルギーが高い運動エネルギーになって発電できる。だから私は頭からダムは否定しません。かつての長野の知事が、「ダムはムダ」などと言って否定していましたけれども、私は頭から否定しません。ダムの水というのは冷たい水の固まりではなくて、太陽エネルギーの一時貯蔵場所だとは思っています。

いずれにしても緑のダムということがあります。そういうダムは要らないじゃないか、コンクリートダムは要らない。すなわち何かというと水源の涵養ですね。それから洪水調節があります。それから根っこをかつと張っているから土壌保全という目的もありますね。そうですね。森林があることによってかつと張る。水源といって、水を涵養してくれるし、その結果洪水調整してくれるし、土壌流出を防いでくれる。

それ以外にアメニティみたいな考え方ですか。何があるかということ、緑というのはやはりきれいですよね。新緑という言葉がありますけれども、どうでしょうか。私はやはりもみじよりも新緑が好きですね、どちらかということ。大学のキャンパスなんかも本当にきれいですね。春、緑でね。また新生が入れば集まって、何か春というのはいいんです。

どうでしょう。ここに、皆さんの中で緑が嫌いという方いらっしゃいますか。どうもあの緑が嫌だよとか緑見るといらいらするという人、います？ どうでしょう。この前、1人いたんですよ。「俺は緑というと頭へくるんだ」と言うんです。「どうしたんですか」と言ったら、「昔付き合った女がミドリってやつでね、そいつにふられたんだ」「それはミドリさんが違うでしょう」と言ったんですけれどもね。まあ、いないでしょうね。

すると、これは緑ですね。要するにこういうものは、われわれが森林を使っている、使用して価値があります。森林が出してくれる酸素を使って、もちろんありがたいですねと。それから木材を使う。使用している価値、使用することによって価値が生じてきます。そうですね。われわれが使うことで価値がある。これはどうでしょう。これはそのままとして、われわれが別に使うわけではないけれども森林自体が持っている本質的な価値かもしれません。

それからもう一つ、緑がきれいだ。例えば森林浴があります。これはフィトンチッドがあるんですが、木漏れ日というのは何か神秘的な感じがしますね。教会のステンドグラスがいい例です。透過光というのは何かこうわれわれに神秘性を与えますね。どうでしょう。ステンドグラスなんかありますね。こう外から来るといいます。

ビールもそうなんです。缶ビール駄目なんです。瓶ビールがいいんです。瓶ビールの茶色い透過光が何かビールのおいしさをイメージさせるわけですよ。どうでしょう。透過光というものが、やはり神秘性。

そうすると木漏れ日がありますね。それで森林に入るとフィトンチッドがあって殺菌効力もあるんだけど、もう一つは水がどんどん気孔から出ていますね。温度が下がっています。森林浴ということがありますね。

そうするとこれは別にわれわれが緑を見ているので、使っているわけではないですね。緑を見ているだけです。見たから減るというものではないですね。そうですね。森林浴で中を歩いているからものが減るというわけではない。それはどういう価値かという内在的価値と言います。

だから森林というのはいろんな価値があるわけです。それを使うことによってわれわれが利益を得ているという使用価値。木材として使います。エッセンシャルオイルも使います。それから酸素を出してくれるから酸素も使いますねという使用価値。

それから見ていてきれいですね。何かこう、神々しいというか荘厳というか、何か新緑で心が落ち着きますねという。これは別に使うというわけではないんだけどその雰囲気の中に入って、それを見ることによる価値。これも内在的価値と言います。

それから別にこれは****いいかどうか分かりませんが、その森林が存在することによってわれわれにいろいろな価値がなってくる。水源保養という言葉もありますね。こんなような価値があると思います。

これ以外に森林の価値は何かありますでしょうか。もしよかったです。はい、お願いします。CO₂吸収ですね。そうですね。お子さんはまだ小さそうですね。じゃあ、これを差し上げますので。これ、ぜひ奥様に読むように言ってください。これを読むと優秀なお子さんになるというのは、いや、これ本当、私が言っているんじゃない。6人の先生が言っているんですから。影山先生とかですよ。リクルートから杉並区立和田中学に行った藤原先生とか灘高の校長とか、それから横浜桐蔭の先生とか。6人の先生がみんな同じことおっしゃるんですよ。「ほめろ」、「ほめて伸ばせ」。

もう一つ言いますと、「いい文章を書かせるには、いい文章を暗唱させろ」と言う。江戸時代の四書五経、暗唱しましたね。あれと同じように暗唱させろ。あの明治大学の齋藤孝先生が「声に出して読みたい日本語」なんて言う本を出しています。やはりいい文章を声に出して読んで、そして覚えてしまえと。そうすると文章力が上がるということをおっしゃっていましたがけれどもその通りだと思います。

ほかにありますか。私は、全く弟みたいな発想で、森林の効用で「山火事を起こしてくれる」と出るかと思ったけれども、だれも言う人いませんね。山火事はやはりうまくないですからね。まあ、こんなものでしょうか。

それで今日このあとまだ温暖化の話なのですが、先程私は、先進国に起因する問題として温暖化と申し上げましたけれども、日本では温暖化の問題、温室効果ガスと言います。温室というのは英語でグリーンハウスと言います。

ちなみにアメリカのブッシュさんが住んでいるのはホワイトハウス。アルゼンチンの大統領が住んでいるのは何ハウスでしょう。ピンクハウスに住んでいるんですね。これはカサ・ローザというスペイン語で。カーサというのはお城ですね。ローザというのはピンクです。なぜアルゼンチンがピンクの家に住んでいる。何か夜の新宿みたいな感じがしますけれども。当時、ブルーのシンボ

ルカラーの政党と赤のシンボルカラーの政党が競ったんです。それが連立組んだんですって。それで、平和になったということで、平和は白。だから、赤の政党、青の政党、平和になった白。3色混ぜようと。これが新しいシンボルカラーです。赤と青と白を混ぜると何色になりますか。普通は紫ですよ。紫ではないでしょうか。赤と青と白を混ぜても。ところがアルゼンチンではピンクになってしまったという不思議な国ですね。私は実は3年前JICAの仕事で行ってそんなこと覚えたんです。

それで、ピンク塗ったのだとって、いろいろ説明を受けたわけです。いろいろ見たんですよ。正面が塗ってある。右側面塗ってある。左側面も塗ってあるんです。私はやはりペンキ屋の息子ですから気になるんです。裏に回ったんですよ。そうしたら裏塗っていない。うそみたいな話でしょう。大統領官舎が3面塗って裏塗っていないんです。考えられないでしょう。これは本当の話ですよ、私が3年前に行ってきたんですから。現地の人に聞いたんです。「なぜ裏塗っていないの」と聞いたら、「塗るお金がないんです」と言う。本当に。

アルゼンチンは破綻しましたよね。あの国は、南はブラジル、パラグアイに接していますね。北はチリのこちらの。大体5千キロですよ。日本は北海道から沖縄まで3千キロぐらいですからね。5千キロあって。大草原があって、石油は出るし鉱物が出る。ものすごく豊かな国です。それが破産してしまったという。まさに資源があってもそれを使う技術がないからです。資源というのは人によって使える状態のものを資源というふうに私は定義していますけれども、やはり技術がいかにか大事かということ、私は理工学部にいるから言うわけではないですが。

悔しいかな、理工学部の人が社長になると新聞記事に載るんですね。文化系の人社長になってもあまり記事に載らないというのがあるんです。でもいかに技術が大事だったことが分かったんです。余計な話で。

温室効果ガスですね。世界的には二酸化炭素が約3分の2と言っています。あとはCFC、フロンとかメタンとかオゾンとか言われます。でも、日本ではもう温暖化の問題はCO₂と言って間違いありません。大体九十数パーセント、世界の92、3パーセントだと思います。日本の温室効果のうちのCO₂が92、3パーセントです。そんなものです。世界的には3分の2です。日本ではもうCO₂なんです。これは明らかに違うところなんです。このCO₂がどこから出てくるかという、もちろんわれわれも出しています。だけど、圧倒的に出ているのは化石燃料です。われわれが使っているエネルギー、一次エネルギーと言います。地球から直接採れるエネルギーは一次と言います。その一次を使って作る電気など、これを二次と言います。そうすると一次エネルギーの約八十数パーセントは化石燃料です。

ですからわれわれがエネルギーを使う、すなわち電気を使う、車を走らせる、ガスを使う、とにかくわれわれがエネルギーを使うということは、化石燃料の燃焼と言って間違いのないわけです。すなわちこれは二酸化炭素の排出、すなわち温暖化になります。ですから温暖化問題というのは、日本では二酸化炭素

の問題とって間違いないです。この二酸化炭素をどうするか。一番いい方法は、一番安全な方法は、森林に吸収させることです。一番安全な方法。現在いろいろ考えられています。従来は海の中、海底、日本海溝****埋めようと、今は更にもうちょっとその下の海の底に入れようという話もあるし。最近一番期待されているのは、使わなくなった炭坑です。廃炭坑。日本にたくさん炭坑ありますね。あそこに圧入しようという案もあります。

でも、どのぐらい出しているか。われわれが出す一般廃棄物は年間5千万トンです。そうすると産業廃棄物は4億トンです。ですからわれわれが出している廃棄物は年間4億5千万トンです。廃棄物処理法で、廃棄物というのは固体か液体です。だけどCO₂はどうでしょう。これは気体だけれど廃棄物と言っていいのではないのでしょうか。だってわれわれがものを燃焼して要らないから捨てるわけですから。廃棄物と言っていいですね。日本の法律では、廃棄物というのは固体か液体ですけれども、CO₂も廃棄物と言っていいと思います。そうしたときに、これが年間何トン出しているかという大体14億トンです。13か14億トンとしておいてください。あとから正確な値が出るかもしれませんが。そうすると、見てください。一般廃棄物は5千万トン。産業廃棄物が4億トン。

CO₂は廃棄物としてその3倍以上出ているんです。だから、わが国が出している最も大量の廃棄物はCO₂なんです。そうなります。そうするとそのCO₂をどうするか。先程から言っているように、森林に吸収させるのが一番いいわけです。しかしとても無理です。無理なんですね。

もう一つ温暖化でこういうことがあるんです。例えば今、370 p p mぐらいでしょうか。合っていますね。一応大体500 p p mぐらいのところで止めたいねというのが大体世界的な目標です。だから、京都議定書を批准してしまして、CO₂排出を抑えたからといってCO₂の濃度が下がるわけじゃないということだけのご理解ください。それは上がってくる角度を漸増と、緩くするんだと。被害をできるだけあとに持っていくんだというのが今の方向なんです。その間に技術開発して被害を何とか防ぐ。被害を何とか防ぐ方法を技術開発していこうではないか、被害の発現をできるだけあとに持っていこうというのが今の方向なんです。

だから、日本が基準比6パーセント減って言っていますけれども、減らしても別にCO₂濃度が下がるわけじゃないわけです。大体500から550ぐらいにしようというのが今の世界的な考え。なぜ500から550かという、大体産業革命のころ270ぐらいですから、その2倍ぐらいなら何とかいいのではないかと、そういうまだ不確かさはあるんですね。

p p m、p p mと言っているけれども、今日の皆さん方は当然、パーツ・パー・ミリオンと分かっていますけれどもね。百万分の1です。だから、パーセントをp p mにするには1万倍するわけです。p p mをパーセントにするには1万で割ればいいわけです。だから地球上の二酸化炭素は0.037パーセント、すなわち370 p p mになります。

私も時々授業で学生に受け狙いをして、「君ら、あれだろう、ppmって分かる?」、「ppmたってピーター、ポールアンドマリーじゃないよ」と言っても全然受けません。「先生、ピーター、ポールアンドマリーって何ですか」と聞かれます。だから、やはりギャグ飛ばすのもTPOを考えて飛ばさないと安売りしてしまうんですけれどね。

ですから、じゃあどのぐらいまでならいいのかよく分かりません、はっきり言って。でも550ぐらいまでに抑えたいねと。できるだけあとにしたいねというのがあるんです。それではもし550になったらどうなんだと。やはりいろいろ予測しています。2100年には水位が18から88センチ上がるんじゃないかとか。今は過去100年で20センチ上がっていますから、18から88センチ上がるんじゃないか。88センチ上がったら大変ですね。そうすると日本の大都市見てください。大都市はほとんどが海沿いです。山の中にあるのは松本ぐらいです。そんな山の中にあるなんて言うのは失礼ですけども、山岳部にあるのはね。大都市はほとんど海沿いですね。

それから温度が1.8から5.8上がるんじゃないかとか。いろいろ予測されています。その予測をいかに狭めるかというのがこれからの学問です。一番今期待されているのが地震予知です。予知学、予測学という。そうですよね。いつ、どこで、どのぐらいの地震があるんだという。ですから、私も化学物質の安全をやっていて、使う前にどういう環境に影響するかというのを自分で勉強していますけれども、やはりそれを事前に予測して適正な手段を取っていくというのが問われるわけです。

そうしたときに今、われわれのような学問では、私は温暖化専門ではないのだけれども、18から88センチも水位が上がるよと。それから1.8から5.8度温度が上がる。それは幅がありますね。だから一番いいのは、実際に地球の二酸化炭素濃度をどんどん上げてしまえばいいんです。いっそのこと五百何ppmと上げてしまえばいいわけです。それでどういう影響が出るか見ます。悪い影響のほうが多かったら下げればいいんですけども、下げられないんです。いいのでしょうか。悪い影響が出たときに下げられないから、地球を舞台としたこういう実験をやってはいけません。

スーパーコンピューターを使って予測して、こんな幅があります。そんなことやるより実験してやろうという意見もあります。でも、もし悪い影響が出たら下げられないんです。従って地球を舞台にして実験をやってはいけません。そうすると予測をします。そうしたら、生活者としては予測の Worst Case を信じて行動しようではないか。これを「環境を保険に入れる」という言い方をします。

私たちは生命保険に入っています。火災保険も入っています。いつ死ぬか分からない。いつもらい火するか分からない。Worst Case を考えて掛け金を払っています。でも、掛け金を払って保険金が下りないほうが幸せです。死んで1億もらってもしょうがないです。それと同じように私たちも環境に保険をかける。すなわち Worst Case を考えてみんなで対策を取ってみよう。それで

その対策が無駄だった、過剰だったらいいじゃないかと。被害が少なくて良かったねということになります。

そんなことでCO₂を森林に吸収させるのが一番いいんですが、こういうことなんです。ノーマルフォレストがございます。適正な森林ですね。これはどういうことを言っているかということ、森林というのは、やはり切らないといけないんです。切って植えることが大事なんです。彼らは生き物ですから、昼間は同化作用といってCO₂を固定しています。夜は異化作用といってエネルギーを使いますから、CO₂を出しています。そうすると一般的に数十年たった木というのは、昼間吸収するCO₂と夜出すCO₂がほとんど同じなんです。だからCO₂濃度はあまり変えてくれないわけです。

その意味でノーマルフォレストと言って、これは何を言っているかということ、同じ年齢、例えば1年、2年でいいですね。ずっと毎年植えていきます。それを同じ面積にしていくわけです。1年目、2年目、3年目。それで一番年寄りの木から切っていくわけです。それでそこへ同じ面積の新しい木を植えていきます。そうすると常に森林面積は一定になります。常に最年長の森林を利用できることになります。ですから森林というのは、切つてはいけないのではなくて、切つてきちんと植えることが大事、そして管理することです。

阿蘇の草千里がありますね。なぜあれだけきれいになったか。まさにあれは人間が管理したわけです。だから草千里なんです。あれを管理しなければブッシュばかりになってしまうのです。草ぼうぼうになってしまう。まさにだからここで言うのは共生です。人間と自然との共生。森林も共生が大事なんです。そして、木の温かみ、ぬくもりというのはいいですね、今更言うまでもないけれども。

法隆寺。ちゃんと管理すれば千年もちます。そうですね。私も昭和36年、大学に入った時におふくろが木の机を買ってくれました。それを今、うちの息子が使っています。あれからもう50年近いですけどもまだ新品同様です。やはりものを長く使えば。私は、「これおばあちゃんに買ってもらったんだよ」と。息子は「ああ、おばあちゃん。お父さん使った机だね」と使っています。何かこういう思い出が入ってきますし長もちする。ぬくもりがありますね。その意味で共生だと思うんです。

江戸時代にこういうデータがあるんです。福岡県の大川市がありますね。大川栄策とかではないんですよ。家具の町です。あそこはなぜ家具の町といったかということ、筑後川の上流に森林があって、その木を使って大川市が、家具の町が発展したわけです。そのころから下流の大川と上流の森林を守っている人たちの間に非常にいい交流があったようです。私たちがこんにち仕事できるのも、上流で皆さんが守ってくれているからだという、そういう上流、下流というものが、河川、流れを通した水系でのつながりがあるようです。

その意味で、今日も出てくると思いますがけれども、私も埼玉県の森林連の委員の1人だったんですけども、やはり広く薄く、みんなで守っていくという、人類共通の共有の財産。別に森林を持つ人の財産ではなくてわれわれ全員共

有の財産だ、それを広く薄く守っていく。なぜかというとその利益はわれわれみんな得ているわけですから。受益者ですから。やはり受益者は負担しなくてはいけないということになります。

ちょうど1分過ぎてしまったので。今日は12月4日ですが、突然ですが、誕生日の方いらっしゃいますか。誕生日ですか。おめでとうございます。それじゃあ1冊お誕生祝いに。（拍手）

今日は3冊しかなかったんですが、少なくとも自宅までは持って帰ってくださいね。こちらのホテルに捨てないということで。

それじゃあもう時間ですのでこれで終わりにしておきます。今日は寝たきりの人いませんでしたので、寝たきりになる心配はないと思います。ご安心してこのあとのパネルディスカッションを勉強してください。では終わらせていただきます。（拍手）

藤岡 北野大さんでした。ありがとうございます。皆さん、大きな拍手でお送りくださいませ。ありがとうございます。（拍手）ありがとうございます。ではここで皆さんにちょっとご案内を差し上げます。

この会場の入口でお見かけになられた方も多いかと思いますが、「森林（もり）の仕事ガイダンス」という看板が目印のご相談コーナーについてです。皆さん、ご覧になられましたでしょうか。うなずかれています方がいらっしゃいますね。ありがとうございます。これは、全国どこでも森の仕事に興味のある方のために、仕事の内容から引越先での暮らしの相談まで、森の仕事に従事される場合のいろいろなご相談におこたえしようと設けているものなんです。森の仕事は初めてという方、大歓迎です。お帰りの折にお気軽にご相談くださいませ。

さて、北野さんのお話に続きまして、このままパネルディスカッションに入ります。これからは2時間の長丁場になります。ではここでほんのつかの間ですが、皆さん、お席に着かれたままで軽い体操をしましょう。では、肩を上下に動かしましょう。

1、2、1、2、1、2、1、ありがとうございます。では腕を大きく上に伸ばして伸びをしましょう。伸びて、伸びて、伸びて。これ以上伸びないぐらい伸びて。はい、おつかれさまでした。体も少し温まったかなと思います。まだ手が上がっている方がいらっしゃいますね。

ここでお願いががございます。真ん中の列、客席の間が空いているようがございます。恐れ入りますが一つずつ中央にお詰めになって、その隣、両脇のサイドのお席の方もその空いた席にお入りになっていただけませんか。これからのパネルディスカッション、真ん中に画面が出て参ります。かなり細かい画面も出て参りますので、中央のお座席の方、どうぞ恐れ入りますが、お立ちいただきまして一つずつ中央にお詰めくださいませ。恐れ入ります。ではその両隣、通路を挟んで両隣の方、恐れ入りますが、お立ちいただいて一つずつお詰めいただけますでしょうか。

そして1番通路ですね。一番端のお席の方、一つずつお隣にお詰めいただけますでしょうか。どうぞ前面のパネルが見やすい位置に移動をお願い致します。どうぞ、お隣が空いておりますので一つずつお詰めください。ありがとうございます。

では、「フォーラム『みどりのニッポン再生』地方からの提言」を始めます。このパネルディスカッションでは、環境保護の原点とも言うべき森林保全について、和歌山県、高知県の全国に先駆けた取り組みを検証しながら専門家の方々にご討論をいただき、荒廃する日本の森林再生の道筋を探ろうとするものです。

それでは討論を始めることに致します。ご出席の皆さんをご紹介します。拍手でお迎えくださいませ。

まずは、飛騨高山の工芸の村、オークヴィレッジ代表で地球環境と森林生態系の重要性を語り続けている稲本正さん。（拍手）東京農業大学教授で森林政策から森林レクリエーションや村興しまで森林をテーマに幅広く取り組んでいる宮林茂幸さん。（拍手）経済界から地域の森林再生に取り組んでいる日本たばこ産業株式会社で地球環境部長を経て現在CSR推進部長の篠原政美さん。（拍手）それから、森林環境税など、全国に先駆けて森林保全に取り組んできた高知県の橋本大二郎知事。（拍手）同じく、緑の雇用や企業の森などで森林保全をリードしてきた和歌山県の緑の雇用推進局長の中野雅光さん。（拍手）そしてこのフォーラムのコーディネーターは、NHKアナウンサーの杉浦圭子さんです。（拍手）皆さん、どうぞよろしくお願い致します。

なお、これからのパネルディスカッションは、テレビ番組の録画収録を行うため、会場内でのカメラ、ビデオ、テープレコーダーなどによる撮影、録音は固くお断り申し上げます。どうかよろしくご協力ください。それでは杉浦さん、よろしくお願い致します。

パネルディスカッション

～みどりのニッポン再生・地方からの提言～

杉浦 はい。ありがとうございます。NHKの杉浦でございます。どうぞよろしくお願い致します。（拍手）

これから皆様方のマイクテストも兼ねまして、パネリストの皆さんに一言ずつお話をいただこうと思います。写真を撮られる方がございましたら前のほうにこの時間にお進みください。自由にこの時間だけお撮りいただきたいと思えます。

まず、私のお隣ですけれども、稲本さんはオークヴィレッジという家具作り集団の主宰者でいらっしゃるけれども、飛騨高山にお住まいなんですよ。

稲本 はい。

杉浦 もう相当冷え込んできましたか。

稲本 今年はやはり地球環境が変なんでね、雪が来て、紅葉が。だから、赤い葉っぱのところ白い雪がかかったんですよ。あまりないんですね、飛騨ではね。ですから意外と紅葉が遅く来たんですけどきれいでね。それでいて雪が来てしまって。マイナスに時々なるんですよ。だから、高山からこちらへ来たら暑くてちょっと困ってしまっているんですけども。

杉浦 そうですか。今日はいろいろ、市民グループなどの動きも教えていただきたいと思いますし、幅広い博識な方でいらっしゃると思いますので、いろいろなお話を伺わせていただきたいと思います。

それから、皆様、ペットボトルに水がごさいますので、今のうちにコップについておいていただけると、本番中緊張なく、手が震えることなく水を注ぐことができますので。スタンバイをお願いします。

そのお隣は宮林先生。東京農業大学の教授でいらっしゃいますけれども、学生部長さんなんですよ、先生。

宮林 どうもこんにちは。今、そういうことをやらされておりますけれども。大変、最近の学生さんは元気がいいといえますか。ちょっと皆さん、ついこの間、農大はだいぶ世間をお騒がせしましたけれども、無事解決をしてごさいますのでご安心願いたいと思います。ただ、やはり、森林だとか農業だとかそういうものにきちんと体験をしたいという学生さんとか、あるいは小・中学校の先生方も総合的学習というような時間を利用しながら、川とか自然との絡みをしていきたいという方がだいぶ多くなっているようです。学生さんもそういうものとうまくコラボレートしまして、大変エンジョイしているように見えます。だんだんそういう子たちが増えてきているのではないのでしょうか。

杉浦 今日は森林の研究者としていろいろお話を伺いたいと思います。

宮林 よろしくをお願いします。

杉浦 お願い致します。お隣の篠原さんは、日本たばこ産業でCSR推進部長を務めていらっしゃいます。CSRは最近よく聞くようになりましたね。

篠原 はい。よく名刺交換すると、「これ何ですか」と5割ぐらいの方に聞かれるんです。コーポレート・ソーシャル・レスポンシビリティという略で「企業の社会的責任」と。なかなか定まった定義がないものですから、それぞれの立場で理解していただいて活動されているみたいです。当社では一応CSR推進部の中では、全社的なCSRの、企業として何を選ぶかというところと、今日のテーマである環境の分野とそれと社会貢献、これを一応私の部で見ているというところでごさいます。

杉浦 今日はどうぞよろしくをお願い致します。

篠原 よろしくをお願いします。

杉浦 そしてお隣は高知県知事の橋本さんです。大変お忙しいと思いますけれども、どのように息抜きをなさっているのでしょうか。

橋本 息抜きですか。あまり休みの日はないんですけども、私も来年60歳の団塊の世代の走りでごさいますので、熟年離婚をされないように、休みの日

は、私が料理番を買って出て、お料理をやっております。それで困るのは、タコのお料理なんかも大体軟らかくしたあとをどうやって調理するかということが出てくるんですが、タコは果たしてどうやったら軟らかく煮たらいいかというようなことがなかなか書いてある本がないんですよね。というようなことで、基礎的なことに非常に悩みながらやっております。

杉浦 そうですか。内輪の話で申し訳ないんですけども、橋本知事は元NHKの社会部の記者でいらっしゃるしまして、NHK職員であったころから愛妻家だということで私たち職員の中では有名でした。そういうことで今もお料理をなさっているということです。

橋本 頑張っております。

杉浦 今日どうぞよろしくお願い致します。

橋本 よろしくお願い致します。

杉浦 そして最後になりました。大変お待たせ致しました。和歌山県の中野さんです。和歌山県では、世界遺産の高野・熊野、その良さを世界に知らしめるためにキャッチコピーがあるそうですね。それをご紹介ください。

中野 「日本の精神文化が息づく」でございます。以上でございます。（笑い）

杉浦 マイクテストになりませんので、もうちょっと詳しくその心を説明してください。

中野 2004年に紀伊山地の霊場ということで高野山、あるいはその熊野古道を中心とする地域が世界遺産に登録されてございます。それはその周辺の森林等の自然と一体となった文化的景観というものが特に特徴となっておりますので、また折に触れて来ていただければそういう文化的なものを感じていただけるかなと思います。以上です。

杉浦 はい。今日は熊野古道の話も出てきますでしょうか。楽しみにしております。よろしくお願い致します。それでは「フォーラム みどりのニッポン 再生 地方からの提言」を始めさせていただきます。

～森に何がおきているのか？～

VTR上映（豊かな命の森）

杉浦 地球の温暖化や異常気象による災害のニュースなどを聞くたびに、今私たちの住んでいる地球はどうなっているのかと不安を感じていらっしゃる方が多いことだと思います。21世紀は環境の時代と言われております。地球の環境をこれ以上損なわずに次の時代につないでいくためにはどうしたらいいのか。それは現代に生きている私たちの最大の課題ではないでしょうか。日本の国内を見ますと、環境保護の原点とも言うべき森林が荒廃して森を支えてきた山村も衰退が止まらないといえます。そこでまず日本の森林が今どういう状況にな

っているのか、映像にまとめましたのでご覧下さい。

V T R 上映（森の荒廃とその足跡）

杉浦 V T Rにありましたように、日本の森のおよそ4割は人工林なんです。本来は人が木を植えて、手入れをして維持すべき森なのですが、その人工林が放置されて荒廃している。そのことが何より問題になっているようです。一方、地球規模の大きな話としましては、温暖化という問題があります。その原因は、温室効果ガス。つまり大気中の二酸化炭素濃度の上昇と言われてはいますが、その二酸化炭素を吸収して酸素を供給、吐き出してくれるのが森林なんです。その森林が荒廃しているということでは、大変なことになってしまいます。

2005年、森林再生などにより二酸化炭素の削減を世界に約束した京都議定書も発効しています。今日はこの荒れた森林をどうやって再生し、管理し、利用していったらよいのかを考えながら森林保全の最先端、先進的に取り組んでいる和歌山県、高知県からの提言も交えて討論致します。

まず稲本さん、やはり日本の森林の現状というのは相当厳しい状況なんではないでしょうか。

稲本 私のところは、正確に言うと岐阜県大野郡清見村、今、高山市になったんですけども、昔は清見村大字牧ヶ洞字オクムラと言う。そんな名前分かるように、周りが全部山なんですけれども、そこにですね……。今、高山市は実は東京都より大きいんですよ。

杉浦 広いわけですね。

稲本 そう、東京都より大きい所に、人口は東京都の何分の一だろう。数十万しかいないわけです。その人たちが、じゃあ東京都より大きい、そこはほとんど森林が80パーセントぐらいですから、それを手入れできるかというところできないわけです。

やはり木というのは、当たり前なんですけれども、枝と枝がぶつかり根っこと根っこがぶつかってしまったら、もう大きくなれないわけです。その枝と枝がぶつかり、根っこがもうぶつかっている状況の木がいっぱいあるわけで、これはいわゆる針葉樹、杉、ヒノキだけではなくて、広葉樹、いわゆる葉っぱの広い木も……。日本は大体皆伐主義でしたから、一度に山を切るとどうなるかということ、5年目にはみんな5歳の木になるわけ。10年目には10歳。同い年の木ばかりある。これはちょっとおかしいことでしょう。このフォーラムにもたくさんのいろいろな年代の人がいるからいいわけで、それが同い年ばかりの木があちらこちらにあってぶつかり合っているというのが現状で。

先程、もう林業で手を入れる気がないと言っているけれども、気があっても入れられないんですよ。もううちの村なんてお年寄りばかりですから。僕らが100人ぐらい今新しく都会から住んで、その人たちが唯一若い人ぐらいで、森林組合は平均もう60、団塊の世代で、退職間際の人々が圧倒的に多いですからね

。和歌山県とか高知県は特例なんですけれども、世の中一般にそういう状況なんです。

杉浦 別に放置したいわけではないけれども、もうせざるを得ない状況になっている。

稲本 だって80、90になったら、山は大好きだけれども、行っても力にならないですよ。

杉浦 宮林さん。

宮林 はい。

杉浦 VTRの中に、「森林の中に砂漠ができています」という表現がありましたけれども、これはちょっと分かりにくい。森なのに砂漠ができていますというのはどういう意味でしょう。

宮林 要するに、先程見ましたように土が見えていますよね。雨が降ってもあの中が本来はスポンジ状態になっていますので水を蓄えるんですけれども、そのまま流してしまうんです。そのあとは乾いてしまう。ですから、まさに「緑のダム」と言われていたんですけれども、このところやはり急速に「緑の砂漠化」と言ったら言い過ぎかもしれませんが、進んでいるのではないのでしょうか。

杉浦 森の中の地面は乾いているんですか。

宮林 ええ。乾き始めてきています。これはやはり手入れをしないままに、その中を暗くしてしまっているからです。太陽の日が入らない。そして下層植物が育たない。なおかつ鹿だとかイノシシによって荒らされているわけですので、だいぶ表面が、土壌が荒れてきているということが大きな問題だと思います。

それからもう一つ僕は最近思うんですけれども、農家にどんどん山が迫ってきているんです。ずっと私たちが歩いていくと、昔はきれいな森だったのが何か自分たちに迫ってくるような、そういう感じが見えてしょうがないです。これは恐らく、川の水を汚したり、いろいろなかたちを出してくると思うんです。

それから森林を切った所を植えていないという所も目立ってきましたので、そう言いますと、やはり森林を荒らすということは、僕は森林というのは生命維持装置だと思いますので、いろいろな生命を維持していく装置だと思いますけれども、この装置を壊してきているのかなというふうに感じます。

杉浦 はい、ありがとうございます。お隣の篠原さんが働いていらっしゃる企業は、積極的に森林保全にかかわっていますけれども、篠原さんが初めて森に案内された時、森を見た時、どういう状況でしたか。

篠原 植林の候補地を探すということで初めて訪れたのが、いくつか訪れたんですけれども、和歌山県の中辺路町と言う所で、地元の人に案内されて山の上上がったんです。50ヘクタールの皆伐跡地で、全く木がない状態が50ヘクタールありまして、非常に荒涼とした感じを受けました。ちょうどその時に台風が来ていたものですから、今のお話にあったように土砂が流れて、これは何

とかしなくてはいけないのではないかと個人的にはそう強く思いました。

それから別な所で見たのは、一見良さそうな森なんですけれども、竹が杉、ヒノキを追い越して竹林になっている。それまで知らなかったんですけれども、それはもう森林が崩壊している山のサインみたいなものだとということ。竹林は京都の非常にきれいなイメージを持っていたのですけれども。

杉浦 嵯峨野のイメージがあります。

篠原 森林の中に竹が来ているようだと、それはもう崩壊している証であるということ。地元の人の聞きましてびっくりした覚えがあります。

稲本 ちょっと一言だけ付け加えると、竹というのは1種類で全部覆ってしまうから結果的には破壊なんです。今、アマゾンでも竹がどんどんはびこってきて。アマゾンはものすごく森林生態が豊かだったでしょう。竹は1種類になってしまいますから。1種類とか2種類になってしまうんです。竹というのは意外と森林破壊なんです。それは日本の南のほうは今どんどん増えてきている。

杉浦 ありがとうございます。高知県といいますと、水がきれいで自然が豊かだというイメージがあるんですけれども、高知県の森林も同じように手入れがされずに放置されている状況があるのでしょうか。

橋本 そうですね。皆さん、高知県という思い出すイメージは何かというと、一つはカツオのたたきではないか、もう一つは坂本龍馬ではないかなと思います。カツオはもちろん海のもので、龍馬の銅像も桂浜で太平洋に向かって立っていますので、何となく海の県というイメージの強い県です。

実はもちろん海の県でもあるんですけれども、森林の面積が県の面積の84パーセントある。全国で一番の森林県なんだそうです。しかも、そのうちの65パーセントが先程からお話のあった、戦後植えた杉、ヒノキの人工林なんです。ところが映像にありましたように、外国から安い木材が入って、なかなか経済として成り立たなくなったということで手入れが行き届かなくなる。このために小さな細い木がいっぱい密生してしまっていて、日も差し込まない。だから下草ができない、腐葉土ができないということになりますし、木が大きくなって、根っこを張ってそこに水をためていくというふうな機能も失われている。

このために、高知県は毎年のように台風が来るんですが、台風が来て災害のあった場所をヘリコプターで飛んでみますと、昔は住宅のちょっと上の辺が沢崩れを起こすという状況だったんですが、今はもう山の上のほうから弱った木が根っこそぎだ一と落ちてくる。沢ごと崩れてるというふうな所がいっぱいあります。そのために川を下って海の、川の河口の所に材木がいっぱいあふれ出るというような現象がありますし、その崩れた場所が、土砂がいつも川に流れ込むために川の汚れ、濁水がなかなか引かないというような現象もあります。

一方、水を蓄える機能が弱まっていますので、少々日照りが続きますとすぐ・・・。

橋本 高知県に四国の水がめと言われます早明浦ダムと言う大きなダムがあ

りますが、最近よく干上がってしまって。「ダムを造る時に埋没をした昔の村役場が出てきました」とか「それを見に観光客が来ています」とあまりうれしくない観光客のニュースなどが全国に流れるというような状況です。

自分自身も実は小さな山というか森林を買って、実際に間伐もしてみたのですが、先程のお話にありましたように砂漠化というか、中がもう湿り気がなくなっていますので、相当な斜面ですと立っているだけでもずるずる落ちてきて、作業などとてもできないような状況なんです。そんなことから、本日に日々、いろいろな意味で森林が荒廃しているのというのを実感しています。

杉浦 お隣の和歌山県の実状はどうでしょうか。篠原さんが案内された山も切り取られたばかりで、一面はげ山になっていたんですね、そういう状況だったそうですが。

中野 和歌山県というのは、昔からいわゆる林業地として、古く良質の杉、ヒノキの産地として有名です。古い話をすれば、豊臣秀吉の大阪城築城とか、あるいは徳川家康の江戸城の修築には紀州の木が使われたと言われております。

ところが、今お話がありますように、遠くから見るとうっそうとした立派な山、77パーセントが森林ですので大変立派な山に見えるんですが、よくよく中に入って見てみますと、先程の映像にあるようなうっそうとして下草の生えていないような山とか、あるいは手入れはされているんですけども、これがまた大変残念なことなんですけれども、せっかく間伐をしたんですが、その木をなかなか外へ出して利用するということがされずに、そこに捨て置かれるというような山なども最近目立つようになってきております。

それは要するに、先程からも話に出ています担い手不足、高齢化等の問題とか、何よりも木が安いということです。その辺が理由の一つかというふうに思っております。

杉浦 こんなふうには日本の森が荒れてしまった原因ですけれども、高齢化ですとかVTRの中にも少し触れられていましたけれども、宮林さんはその原因をどう考えていらっしゃるでしょうか。

宮林 基本的には価格のパフォーマンスといいますか木材価格が低迷したから。この辺の原因は、先程VTRにもありましたけれども、外国から安い材が入ってきたというところにあるかと思えます。やはり農業とのかかわりもあると思うのです。農業をきちんとやっていくためには、有機を必要とする里山が必要だったわけです。農家林、農業林といってもいいと思います。こういったところもあまり使わなくなってきた。あらゆる面で、山と人間の関係が疎になってきているところに大きな問題があるのか。

もちろん経済ベースの問題は大変大きいと思いますけれども、やはり人間と森林のかかわりが相当大きく開いてきた。ここに大きな原因があるのではないかというふうに思っています。

杉浦 そして森の役割を考えることに通じると思うのですけれども、森が荒れることでどんな問題が起こり得るのか。今までにも知事のお話の中にもあり

ましたけれども、宮林さん、整理して問題点を教えてください。

宮林 一つは、森林は木材生産をしておりますので、いい木材を出すためにはやはり手入れをしなければいけません。その手入れができませんので森林が荒れてくるということにもなるわけです。

そのほか森林はCO₂の固定、吸収という両方の機能を持っております。これが大体年間9,700万トンと言われております。実は日本人が吐き出すCO₂の量とほぼ匹敵するわけですがけれども、この森林が荒れますと、このCO₂固定量がどんどん減少してくる。あるいは先程高知県のほうから報告がありましたように、どんどん土砂流出が起こっていく。あるいは森林は癒しの機能とかいろいろな機能を持っています。こういうものがどんどん減ってくる。

例えば最近のデータを見ますと、雨が降ってくるときに、雨の中にだいたい汚いものが入っているのですけれども、それが森林を通過して、土壌を通過して湧水となったときには、カルシウムとかいろいろミネラル分がたくさん入っているのですけれども、こういった部分がだいたい減ってきているというデータがあるようです。ということになりますと、やはり森林の総合的な、先程申しましたけれども、生命維持装置としての機能もどんどん減少していくということで、まさに私たちの将来に通じる環境問題にも大きく影響してくるというふうに思います。

杉浦 家の裏山ががけ崩れを起こすのではなく、山の上のほうからも崩れてくるとおっしゃいましたけれども、それはどういうメカニズムになっているんですか。

宮林 人工林というのは、ちょうど日本の土地は傾斜がありますので、急傾斜になっている。海から都市があつて農地があつて、山村があつて、そして里山があり人工林があつて天然林という循環になっているわけです。そのちょうど中間点を荒らしてしまいますと、そこが崩れます。そうすると上のほうにも影響を及ぼす。

杉浦 上の天然林も。

宮林 上の天然林ですね。更に下のほうの農地、住宅にも影響を及ぼすということですので、やはり要は僕は人工林だというふうに思っています。

杉浦 稲本さんから見て荒れた人工林を放置している問題点はということだと思いますか。

稲本 今一番日本人が困ってきているのは、実のところ水なのです。水が悪くなってきました。ここでも不思議なことでしょう、ペットボトルで水を飲まなければいけないというのは、ある意味ではね。本当を言うと、水というのは世界の中で日本は最大の水資源国に近いんです。淡水のきれいな水ね。水の中でもミネラルの多い水がいい水なんです。言われましたように、山のほうがちゃんとしていけば、農業はもっと活性化しなければいけない。今困ってしまったのは、山が荒れたことによって農業が駄目になってしまっているんです。日本の食糧自給率は40パーセントぐらいですか。6割の人が、もし食糧が輸入されなければ死んでしまうわけです。だから農業が駄目になった。

もっと言うと、沿岸漁業が駄目になってきているんです。ミネラルの多い水がないと駄目になってきているので。有名な話は「森は海の恋人」と言っ
て、畠山さんと言うのは気仙沼で・・・。友人なんですけれども、一生懸命木
を植えて、こちらも苗を一生懸命送っているんです。それを植えてみたら、実
際にカキが元気になって、おいしいカキができた。だからはっきりしているん
です。山が荒れると農業、水産業が駄目になる。だから僕らはもう1回、自分
の身の回りから、単に木材という資源だけじゃなくて、しかも、確かに人工林
も大切なんですけれども、針広混交林が日本の基本だと思うので、広葉樹と針
葉樹をうまく併せつつ。

それから最後に、何よりもやはり木材を使わなければいけない。だって、出
口がなければ、お金にならなければ林業の人は仕事ができないわけです。仕事
ができないから荒れるという回路になっているので、やはり出口を作るという
ことと、国民が食糧や水産、農業、林業が森から来ているということを理解す
るようになるべきだという気がしているのです。

杉浦 森が荒れると、地元の第一次産業すべてが衰退していくということだ
すね。県民の生命、財産を預かる行政の立場として、重複するかもしれませんが
おふた方から伺いたいと思います。両県では何に困っていますか。

橋本 先程、宮林先生が農家に森林が迫ってくるというお話をされました。
稲本さんが、森林が駄目になると農業も駄目になるというお話があって、かか
わっているのではないかと思うのです。というのは、やはり森林が弱ってきた
ために農業がなかなかやりにくくなった。ほかの理由ももちろんあります。け
れども、そのために農業を放棄される。そうすると、その跡地に木を植えてお
けば子孫のためになるかなというので木を植えていかれる。だけどその木がな
かなか役に立たないというので、どんどん山が下に下りてきているという現象
があって、ある意味でそういう悪循環が起り始めているというのは非常に困
ったことだと思います。

それから、竹のお話も出ました。要は竹も昔はいろいろな使い道があったわ
けですよ。昔の人に聞くと、竹林に入って天秤棒を担いで動けるような竹林
がいいということを言われるのですが、今そんなことをしたら、2メートルほ
ど入ったらもうがちがちとぶつかって動けなくなってしまう。

それと同じように、竹もそうですし木もやはり使えなくなってきた。今出口
のお話がありましたけれども、このことが一番今日の最終テーマにもつながっ
ていくことかと思えますけれども、これが一番県としても困ることだと思いま
す。

杉浦 中野さん、どうぞ。

中野 今までお話がありますように、いろいろそういう水の問題あるいは水
質の問題、あるいはそこに住んでいるさまざまな生物の多様性の問題。あるい
はそういう地域の経済的な問題がいろいろあると思うのですけれども、やはり
今一番、われわれ直接行政を担当している者として気になるのは、やはり災害
の恐れです。その辺が一番気になるところです。

杉浦 災害そして生物の多様性の話がちらっと出ましたが、稲本さん、補足することがありますか。

稲本 実のところ、岐阜県の隣の富山県で熊が出て、死んだ人も出たんです。熊も単純な話なんです。山に食べるものがあれば下りてこない。食べるものがなくなって、本来ナラとかドングリとかクリを狙って熊は食べていたわけです。それがなくなってしまふから下りてくるわけです。残飯を一度熊が食べると、熊というのはその残飯が食べられるということは自分のテリトリーだと思うわけです。自分のテリトリーになったところへ人間が来たら、やはりやっつけなきゃいけない。

それから熊というのも味はよく分かる生物で、おいしいものを1回食べたら、そんなもの、山に帰りたくないんです。そういうことで、具体的に起きているのは、熊辺りで非常にパフォーマンスの高い問題になっているけれども、現実にはそれによく似た問題がいっぱいあって、やはり生物がどんどんもう山に住めなくなっている。

そうすると、生物が住めなくなると、先程言ったように、同じようにミネラルのいい水が出なくなる。森林というのは生態系ですから。だから、やはりちゃんと住み分けるといふか、熊と平和条約を結んでいなければいけないんです。平和条約の条件は何かという山を整備するということなんです。

杉浦 つまり、本来熊がいた辺りの森林が荒廃して、先程からお話が出てるようにどんどん山が迫ってきているから、人家に近いところまで山が迫ってきて荒れていて、そこに熊も一緒に出てきたと。

稲本 そう、熊も見晴らし・・・。彼らは人間が一番怖いわけです。だから見えれば襲わない。ところが、暗闇から急に人間が来るから襲っちゃうというのもある。あまりにも密集しているからね。

宮林 ちょっといいですか。やはり熊は、今言われているように、人間がある程度営みを取っていると、人間のにおいがたくさん付いていますので、なかなかそこから入ってこられない条件があったと思うのです。しかし人間がだんだん山から里のほうに下りてきてしまっていますので、今あまり入りませんのでやぶ化してきますから、どんどん彼らは自分のすみかだと勘違いしまして下りてくる。そうすると、おいしいえさがあるものですから。これはやはり覚えてしまうのだらうと思うのです。

もう一つ、やはり現状というのは、僕は今まで日本の森林を荒らしたというのは、木を切り過ぎたとか荒廃し過ぎた、つまり開発をしたとかというのはいっぱいあったと思いますけれども、ここのところ、木を切らないで、使わないで荒らしているのではないかという、新しい局面が来ているのかなという感じを受けてしょうがないです。

稲本 まさにそうだと思います。

杉浦 山を、木を使わないことによって荒廃をもたらしていると。

宮林 はい。

杉浦 ありがとうございます。このように荒廃する森林に対して何とかしよ

うと立ち上がったのは地方でした。特に和歌山県は県の77パーセントが森林、高知県は84パーセントとどちらも日本有数の森林県なんです。ほかの県に先駆けて、先進的な取り組みをしています。その両県の取り組みをレポート致します。

～ 地方からの提言 ～

V T R 上映

(和歌山県「緑の雇用」「企業の森」
高知県「森林環境税」「協働の森」)

杉浦 今地方財政はどこも逼迫していますし、地域の過疎、高齢化も進んでいます。お金もない、人もいないという状況の中で、両県では森林再生への取り組みを始めたわけなんですけれども、税金ですとか補助金、企業の力を借りてということで事業をスタートさせているんです。スタートにあたってなかなか厳しい局面もあったかと思しますので、詳しく聞いていきたいと思います。

まず和歌山県から参りましょう。他県に先駆けて森林の再生に取り組むことになった原動力、きっかけは何でしょうか。先程からありました危機感でしょうか。

中野 そうですね、いわゆる地方の時代ということを言われております。けれども、それは一方で、逆の意味で各地方との競争も始まるわけです。だから、それぞれの自分のところの地域がどういう地域ポテンシャルを持っているか、それをどう活用していくかということから始まると思うのです。

そのうちで、和歌山県を考えた場合、森林というものが大変そういう貴重な資産であるという考え方で、これをどう活用していくかということからスタートしたと思います。これは平成14年からやっているんですけれども、当時の社会的な状況をいろいろ踏まえて、山村がこちら側の問題、あるいは都市側の問題がいろいろある中で、それをひとつ活用していく方法ということで、この緑の雇用に取り組み始めた次第です。

杉浦 企業の森のほうは平成15年からでしたかしら。

中野 はい。もうちょっと緑の雇用を説明しますと。

杉浦 それぞれにどういう勝算といいますか展望があったんでしょうか。

中野 平成14年当時、われわれ和歌山県のいわゆる中山間地域、山村過疎地域においては、人口減少あるいは高齢化というような問題が大変起こってきておりました。それは古いんですけれども、そういうことで、先程から出ているような森林整備が滞っているという状況が生まれています。更に進んで、地域コミュニティーが崩壊しかかっているという状況も生まれていました。

一方、都市部のほうを見てみますと、当時まだ不況でリストラ等の問題が大変大きな社会問題になっておったと思うんですわ。そういう中で、山村の問題

、都市の問題とある一方で、京都議定書などの関係でいわゆる森林環境問題、森林整備の必要性というものがクローズアップされてきた。その中で、ひとつ和歌山県のそういう森林環境の保全ということに取り組むことによって、またそれを望んでいる都市の方もかなりの数いらっしまったので、それをうまくマッチングすることによって地域の活性化につながるというようなことで、緑の雇用に取り組んだということです。

また企業の森のほうは、そういう取り組みの延長線上にあるんです。一つのそういう企業という組織の力、それはもちろん資金的な力もありますし、人のマンパワーとしての力もあると思うんですが、そういうのをひとつ貸していただきたいということで、そういう企業の森にも取り組み始めたというところでございます。

杉浦 それぞれ二つの取り組みで、どういう効果が上がっていますでしょうか。移住者も家族を含めて500人ということですね。

中野 緑の雇用のほうは、大体これは県内の人ももちろん含まれていますが、県内外の人を合わせて大体330名ぐらいの方に森林作業に従事していただいております。その中で特に都市部から、これはいろいろ全国各地からですが来られた方が約200名、家族を含めて500名ということで、大変地域コミュニティーの担い手としても活躍していただいていますし、森林整備の担い手としても活躍をしていただいているということです。

特に森林作業に従事している方は、和歌山県の場合、今まで平均年齢が57歳ぐらいということだったのですが、緑の雇用を進めた結果、10歳若返って47歳ということになって、大変やる気のある方が多いという成果が出ています。

それから企業の森でしたか。企業の森のほうも、現在23の企業や団体が、大体134ヘクタールの森林の整備に携わっていただいております。年間企業の方等合わせて大体2千名ぐらいの方が、森林整備、植栽とか下刈り等の活動に参加していただいております。

杉浦 団体とおっしゃったのは労働組合なども入ってですか。

中野 はい、労働組合などもございます。

杉浦 NPO法人ですとか。

中野 はい、NPO法人とか。

杉浦 そういった方々が山に入ってきてこられて、地域はどのように活性化されたんでしょうか。

中野 特徴的なことで、要するに企業の方々に森林整備のみをやっていただくということではなしに、そのときに地域の方との交流ということも同時に・・・。それぞれ企業の方のももちろんリクエストに応じてなんですけれども、例えば木の根っこで何か木材加工をやってみたり、あるいは採ってきた山菜で料理をしたりということで、地元の人たちと交流してもらっています。

その交流というのは何だということになるんですけれども、いわゆる山村です。昔から人間はそういう山の幸を利用して生きてきたという、そういう山と人との関係、森と人との関係に触れていただくという意味合いが大変あるわけ

で、そういう意味でも地元の方も大変喜んでいただいております。また企業の方も貴重な体験をしたという評価をいただいております。

杉浦 ここが肝心なんですけれども、そのことによって実際に森林はどのくらい復活したんでしょうか。これが一番大事だと思いますが。

中野 大変厳しいご質問です。はっきり申し上げて、134ヘクタールということなんで、だから、和歌山県の森林が34万ヘクタールで、そんな134ヘクタールで森林がこれだけ良くなったということでは、直結するものではないんです。だけど、一番大きなのは、やはりそういう2千人の方がそれに直接参加して、直接肌で感じて考えていただける、参加していただける、その広がりがすごく大きなものが期待できると思いますので、その辺の効果というのは相当あるのかなというふうに思っております。

杉浦 では、これからの課題はどういうふうに考えていらっしゃいますか。

中野 課題ですか。やはりまだまだそういう広がりを持って、特にそういう地域の方との交流などのほうにも力を入れて、できるだけそういう大きな広がりになるように持っていきたいというふうに思っております。

杉浦 ここまで和歌山県の取り組み、実状を聞いてきましたので、これからの森林保全全体の方向を示してくれるものとして、和歌山県から提言というかたちでお話をしていただきたいと思います。

中野 今までお話ししてきましたように、確かに企業の森というのは年間2千人という数なんですけれども、ただ経済的な効果というのは和歌山県にとってはございます。それと、やはりわれわれが期待するのは、そういう山村と都市の関係とか、あるいはそういう森林、山村への関心を持っていただくということが大変大きな問題になると思うんです。やはりこういう企業の森というものに大勢の方に参加していただくことによって、森林再生への膨大なエネルギーの源になるというふうに思っております。

そういう意味から、例えば和歌山県だったら「紀州・山の日」などいうのをやっているのです。それで山村の恵みに感謝していただく日などもやっているのですが、そういうのも含んで、企業、団体等が参画しやすいような税制面での支援とか、あるいは何かそういうような仕組み、全体のシステム、そういうシステム作りが必要ではないかというふうに考えております。

杉浦 森林保全に協力してくれる企業への支援？

中野 そうです。だから企業のほうもやはりね。ただ企業の力というのは、大体農林水産業に就業している人は1パーセントぐらいしかないと思うんですけれども、二次、三次産業に就業している方がほとんどやと思うんです。そういう意味からも、企業の関係の方に参加していただくというのは、大変なエネルギーを生み出すと思いますので。とはいえ、経済活動をしているので・・・。

杉浦 そうですよ。

中野 はい。だから、そういう意味ではそういう目に見えたかたちでの支援というのも必要ではないかなと。それをやったことによって、企業がそういう

、ただ森林整備をしたというのだけではなく、先程の社会貢献も含めて、そういう地域との交流も含めて、そういうふうに関与をしたことに対する見返りというんですか、そういう企業はそういうものを認めるというような、そういう制度が必要なのかなというふうに思いますけれどもね。

杉浦 その制度というのは、国の支援も必要ということですか。

中野 そうですね。高知県さんなどもいろいろ試験的にようやられておりますけれども、そういう意味も含めて、全体的なそういうシステム作りが必要かと思えます。

杉浦 ありがとうございます。和歌山県からの提言については、後程また議論を深めることにしまして、今度は高知県のお話を伺います。何しろ県民1人辺りの森林面積が全国平均の6倍を超えているという日本一の森林県です。その高知県で、森林環境税という税金が導入されています。この導入の背景には何があったんでしょう。

橋本 一番のきっかけは、2000年に地方分権一括法というのが施行されて、地方でも独自の税を作る規制が緩和をされました。そこで高知県でも何か独自の税というものを考えていこうということを庁内で議論しているうちに、やはり高知県だから、一番ふさわしいものは森林にかかわるものではないかということが出てきたのがこの森林環境税という考え方です。

その背景は、先程お話があったように全国一の森林県であるということ。にもかかわらず、これも第一部のところでお話があったようになかなか森林の手入れが行き届かない。しかし高知県の中でも、例えば高知市に住んでいる人だと、なかなかそういう森林のことに興味を持ってくれない。これを県がただ予算だけ、何か山の予算を組みますと、また公共事業が減ってきたから山のための公共事業を増やしたんじゃないかというぐらいにしか受け取ってもらえない。もうちょっと、少しずつでも負担をしてもらうことによって、都市部に住む人にも山のことに興味を持ってもらう。興味を持つだけではなくて、ときには出掛けていっていろいろな活動に参加をしてもらう。そういう動きを作りたいという思いで作ったのが森林環境税、そんな背景です。

杉浦 景気が低迷している中での税の創設ということで、やはり難しい決断ですよね。

橋本 大変ですよ。そもそも税金が増えることを喜ぶ人はどこにもいません。しかも先程言いましたように、最初のきっかけが地方分権一括法、つまり地方分権が進んで独自にいろいろな税金を作りやすくなったということがきっかけですので、地方分権というのはみんな県民の皆さんに対してはいいことばかり言ってきているわけです。ただ、結果として地方分権が進んで何か税金だけ増えたんじゃないのということを言われると、あとでいろいろな分権の仕事を進めるときにやりにくくなってしまおうということで、2年間かけてじっくり議論もしました。

市町村の職員の方も入っていただいてプロジェクトチームを作って、かなり粗いといっちはいけませんけれども、試案の段階から二つほどの案を表に出し

てどちらがいいでしょうかねということをお県の皆さんと一緒に議論をいたしました。大体数えてみると65回ぐらいシンポジウムとか意見交換会というのをしました。その結果、先程の映像にもありましたように、議会でも全会一致で賛成をいただいたということです。

杉浦 この森林環境税で集めたお金で森林再生の何がどういうふうに進んだんでしょうか。

橋本 一応目指した事業は二つあります。一つはソフトの事業、もう一つはハードの事業です。ソフトの面では、やはり町に住んでいる人にも関心を持ってもらう啓発ということがありますし、それから山に出掛けていってもらっていろいろなことにかかわっていただく。そういうきっかけ作り、こういうソフト事業が一つです。

もう一つはハードで、冒頭に申し上げましたような早明浦ダムのように水源のあるところ、この周辺で荒れている森林というのは、やはり早く手を付けていかなければいけないということで、こういう水源地の近くで荒廃した森林を緊急に間伐していくというハードの事業。こういう2通りに使いました。

その結果、ソフトのほうでは「こうち山の日」というのを作りました。これは和歌山県さんとか山梨県さんで先行して取り組まれたものですがけれども、高知県では11月11日、つまり1が四つで木がいっぱい並んでいるというイメージと、11月ぐらいからが間伐を始めるのにいい季節だという二つの意味合いを込めてですがけれども、「こうち山の日」というのを2003年から始めました。翌年の2004年からは高知だけではなくて四国4県がみんな一緒になった「四国山の日」というかたちに広がってきていますし、3年間で高知県内だけでも8万6千人ぐらいの方が、延べですけれどもいろいろな活動に参加をしていただきました。

またハードの面では、水源地近くの森林1千ヘクタール余りを緊急間伐というかたちでやりました。これも先程和歌山県さんからお話がありましたように、全体の面積から言えば微々たるものなんです。だけど、そういう水源地の近くに山を持っていらっしゃる、森林を持っていらっしゃる所有者の方に、「あ、そろそろ何かしなきゃいけないな」という思いを持っていただいたというか、動機、気付きの最初のきっかけになったというところに意義があるのではないかと考えています。

杉浦 もう一つの協働の森という事業ですがけれども、この協働の森は協力して働くという字を書きますが、こちらの導入のいきさつと成果を教えてください。

橋本 これはちょうど京都議定書が発効したということのをきっかけに、あとで出るかもしれませんけれども、排出権といって、企業がいろいろ生産活動で炭酸ガスなど温室効果ガスを出します。その分、逆にそういう炭酸ガスを減らすという作業に企業が投資をしていけば、その分の炭酸ガスを生産活動で出してもいいよという取引です。こういうような制度が世界全体でできてきました。そうであれば、この森林を整備することによって炭酸ガスの吸収量が増える

わけですから、その部分に企業にも参加をしていただこう、ぜひ手を貸していただこう。

和歌山県さんの企業の森と基本的には考え方は同じだと思いますけれども、そうしたことで始めた事業で、今10社がこの事業に参加をしていただいております。このことによって、もちろん森林の再生に協賛金を出していただいております。このことによって、もちろん森林の再生に協賛金を出していただいております。お手伝いをいただくということと、先程の映像にもありましたように地域の方々と、また幅広く県民の方々と交流をしていただく。こういうことによって、お互いがギブ・アンド・テークというふうな、変に利益的なことではないですけども、プラスのいろいろな気付きを得る、こんなことを目標にしています。

杉浦 そしてこれからの課題ですけども、森林環境税については、導入から5年後の制度の見直しが迫っています。これについてはどうされますか。

橋本 ちょうど今年が最終年度、5年目ということになりますので、この森林環境税をこれからどうするかということをお県の皆さんと話し合いたいと思います。ぜひ続けていきたいと思うのですが、その続けていくという思いの中でまた県民の皆さんと話をすることで、5年前の熱い思いをもう一度思い出していただけるんじゃないかと思っています。

杉浦 お聞きいただきましたように、高知県も全国に先駆けて森林保全の取り組みを進めてきたわけです。ここで高知県の提言としまして、これからの森林保全の方向性をすばりお話ししていただきます。

橋本 今お話をしてきたことの延長線上で三つほどの提言をさせていただきたいと思います。国内の企業の皆さん方に、海外で植林などの投資をされるのもいいと思いますけれども、ぜひ国内の森林整備にももっと力を貸していただきたいというのが一つです。

二つ目に、そのためにはやはりもうちょっと企業の皆さん方のメリットというか動機付けが必要ではないか。そのために国に、先程言いました排出権取引という、難しい言葉になりますけれども、炭酸ガスを減らす森林の整備の仕事を支援していただく。その分、そうやって減らしたものを企業の生産活動に使ってもいいですよというようなことを国内でもきちんとした制度として設けていただきたいというのが二つ目。

そして、そのことを進めるためにも、高知県では協働の森で参加をしていただいた協定して下さった企業の皆さん方に、その森林の整備で吸収できた炭酸ガスの量はこれだけですよというCO₂、炭酸ガスの吸収の保証証書というものを出していきたいと思っているのです。これをぜひやっていきたいというのが三つの提言ということになります。

杉浦 つまり企業側としては、これだけうちの企業は地球温暖化防止のために貢献しているんだという、そういう数値というかそういうものをPRできるわけですね。

橋本 そうですね。今世界的な動きで言えば、オーストラリアに広い土地を買ってユーカリのようにすぐ木として成長していく、そういうものを植えたほうが炭酸ガスを減らすことの実績につながるわけです。だから国内の企業もほ

とんどがオーストラリアでそういう活動をされています。このことはこのこと
でいいと思うんですけれども、その分国内での森林整備への支援というのは、
篠原さんの企業がそうですし皆さんそうですけれども、CSRという社会貢献
という分野にとどまっているんです。

これをもうちょっと地球の温暖化防止という、1ランク高いというと失礼な
言い方になるんですけれども、そういう取り組みにつなげていく、そのために
は森林の整備のお手伝いをいただいたことによって、これだけ炭酸ガスの吸収
に成功しましたという証書を差し上げていくことが必要ではないか。こういう
証書の運動をまた森林環境税が全国に広がっていったように、全国でこの森林
吸収証書というのを出すようになっていけば、それがやがてもっと大きなうね
りになって、企業の皆さん方も入りやすい取り組みになっていくのではないかと
いうことを思っています。

杉浦 今橋本さんからお話がありましたけれども、宮林さん、森林の研究者
としまして、二酸化炭素の吸収証書の発行そして排出権取引制度の創設をどの
ようにお考えになりますか。

宮林 基本的には、今知事が言われたようにきちんとした方向性というのは
取っていかねばいけないだろうと思います。今の段階では排出権と吸収権
の配分の問題とか、あるいは法制度の問題とか、あるいは税制度の問題等々、
いろいろ議論しなければならないことがまだ多々あるようなんです。ですから
、早急にこの辺は議論をしていただきまして、国際の中でもきちんとした排出
権の取引というところまではまだ進んでいないというふう聞いておりますの
で、その様子を見ながら、やはりきちんとしたものを作っていくべきだろうと
思いますけれども、今のところはまだ検討しなければならない課題が多々ある
というところではないかと思えます。

杉浦 例えば環境税について。

宮林 環境税についてもそうですけれども、環境税については、排出権問題
とのドッキングで言いますと、企業にある程度の枠を付けなければいけないよ
うなことも出てきます。そうしてきますと、その枠と同時に、ではどれだけ排
出権を買うかということになりますと、その部分を達成してから企業は更にそ
の排出権問題というようになってくるわけなんです。そうするとおのずと枠が
はまってしまう。そうすると何か経済統制みたいになってしまいますので、こ
れはやはり問題があるのかなと。もちろんそれだけではありませんけれども、
そういった問題が少しあるみたいなんです。

そうなってくると、もうちょっときちんとした議論を積み重ねていく必要が
あるのかなというふうに思っております。ただ基本的には、早くそういう状況
を持っていく必要があるのかなと思えます。

もう一つは、森林そのものは社会資本であり公共資本というふうに考えます
と、これを市場ベースだけに乗せるといふ議論もちょっと無理なのかなという
気はします。この辺を整理していかないと難しいのがあるのかなという感じを
受けています。

杉浦 排出権取引のことは後程また議論することに致しまして、橋本知事、どうもありがとうございます。ここからは、両県の提言を受けて更に議論を深めていきたいと思えます。

ただいまの両県の提言の中に国への要望もありましたので、森林保全を管轄する林野庁として、この和歌山、高知両県の取り組みをどう評価しているのか聞いてみました。例えば和歌山県の企業の森のプランでは、県などがまず提案をしまして、国がそれを認めて予算付けをするという、これまでも国がこの事業を支援してきています。V T Rをご覧ください。

V T R 上映

(林野庁森林整備部研究保全課 飛山龍一 森林保全推進室長)

=和歌山県、高知県さんは、まず特徴的なのは、自治体におけるトップの方々が企業を回られて、森林整備のために企業の森というかたちでトップセールスされている。この点は非常に評価できる点ではないかと思っております。国としましても、例えば緑の募金というかたちで企業からの募金をいただいております。

それから、国有林のほうでございまして、「法人の森林（もり）」という制度がございまして、やはり国有林を活用した法人の森林作りというのを積極的に進めてございます。その中でやはり一番話題になるのが、最初に相談をしに行く窓口機能です。これはやはりしっかりしておく必要があるのではないかとというのが話題になってございます。

そういう意味で、和歌山県さん、高知県さんの取り組みというのは、非常に参考になるところがございまして、私たちも企業が相談に行く、あるいは地権者との間に立ってサポートする。そういった協議会のようなものが作れないか。いわゆるコミッションと呼ばれているような相談窓口のようなものが作れないか。今勉強会を進めているところでございます。=

杉浦 和歌山、高知両県の森林保全に参加している企業の担当者として、篠原さん、県の対応をどういうふうにかこれまで感じてこられましたか。

篠原 一言で言えば、私の行政の方へのイメージががらっと180度変わりました、当然悪いイメージからいいイメージなんですけれども。この企業の森とか協働の森を説明に来ていただいた方、和歌山県の職員の方それから高知県の職員の方ですけれども、非常に丁寧に制度の趣旨とか企業にとってのメリットそれから企業にお願いしたいこと、それから県ができること、その辺りを説明していただきまして、一言で言えば、ああ、現地に足を運んでみようかなという気にさせたという感じです。

それから、あとであれですけれども、実行する中では、行政というどうしてもいい意味では悪い意味でも縦割りです、横に、こういう制度というのは非常に関係の部課というかいろいろなセクションが関係するわけです。われわれ

れ民間の人間は、それを一つ一つ行っていたら全く進まないんですけれども、そういう多分複雑な補助金とかいろいろなかたちであろうかと思うのですけれども、その辺りは県の窓口の方が一手に引き受けて、表面に出て全然そういうのが見えてこない。

森林保全をしたいという気持ちのある企業の方というのはたくさんいらっしゃると思うんですけれども、悲しいかな、ノウハウがない。そういうところを、こういう県のノウハウ……。そこまでには多分長い期間をかけて議論があったと思うのですけれども、そういうことが整った制度であれば、その意のある企業若しくは団体でもいいのですけれども、非常に乗りやすい、ハードルが低いシステム、制度と思っております。

杉浦 ということは、言ってみれば、森林保全については素人である企業と地元の森林組合などのプロとのマッチングをきちんと行政がやっているということでしょうか。

篠原 そうです。その代表格の2県かと思えます。

杉浦 なるほど。企業としましてはどのようなスタンス、考え方でこの事業に参加していらっしゃるんですか。

篠原 当社は名前から分かるようにたばこ、それから現在では医薬とか食品とかやっております、原材料としてたばこの葉っぱはもちろんですけれども野菜とかお茶の葉っぱとか、自然由来の原材料を扱っているわけです。そうすると、自然の恵みによって企業活動をさせていただいている。その中では、いろいろな環境に悪い負荷、生産の過程では当然そういうエネルギーを使うわけです。それはそれで減少する努力は企業としてやっているわけですけれども、そういう自然への感謝、それから先程私のセクションのCSRの企業の社会的責任というその一貫として、森林植林、森林保全活動ということを始めようというふうになったわけでございます。

杉浦 具体的には、植林や間伐などをなさっているんですよね。植えているのは杉、ヒノキですか。

篠原 植林をやろうと言ったら本当に大議論になりまして。やはり花粉の問題もあります。ただし経済林で、その再生によってなりわいになっていらっしゃる方もある。ただそれはそれで、われわれとしては間伐したあとに植えるのはできれば広葉樹にさせていただきたいというところで、当然経済林の部分は経済林の部分で残しながら、われわれとしては広葉樹をお願いする。別なところでは、針葉樹の強制間伐をやって、それから広葉樹を植えて混交林という、混ざったそういう森を作る。それをモデル林にするという取り組みも別なところでやっています。

杉浦 それは地元との相談で決めていらっしゃるわけですか。

篠原 その樹種につきましては、われわれは素人ですから、やはり地産地消ではないんですけれども、その地域にその山に合ったものというのがあります。そこはその地元のプロにお願いして、何を植えたいかというのは選定していただいています。

杉浦 その契約期間というのは5年、10年？

篠原 和歌山県の例ですと10年。これは面積が50ヘクタールということで大きいものですから、毎年10ヘクタールずつ植林するというので、5年目で植林して終わりだと、ちょっとそのあと育成にコストも人手も掛かるものですから、そこから5年ということで契約期間は10年にさせていただきます。

高知県の場合は間伐ですけれども、それは一応5年の中で150-160ヘクタールを間伐をしたり広葉樹を植えたり整備していく。そのあとは地元にお返しをするという契約の内容になっております。

杉浦 ただ、木を植えて大木になるまで大体5、60年ですか。

篠原 そうですね、長いものは。

杉浦 その木の一生で言うと本当にパート部分ですよ。

篠原 はい、わずかの期間。

杉浦 それでどう成果を上げていくのかということですが。

篠原 私は最初は山の問題というのは植林すればいいんだと思っていたんですが、山の場合には地ごしらえをして植林をして、下草刈りをやってとか、ちょうど左の下の間伐とか当然のことなんですけれども人手が入らないといけないわけです。

たまたま最初の出合いが間伐地だったので、植林をすればいいんだと思っていましたら、地元の森林組合の方とかお話を聞いていますと、やはり間伐が非常に問題であると。要するに植えたら植えっ放し、それからなかなか経済的な問題もあって手が入らない。要するに、このサイクルのどこかで止まっているわけです。それぞれの若い山、古い山があるんですけれども。

われわれができることは、この止まっているところをちょっと動かして、そのお手伝いをする。そうすると、人が山に入っていく、またそこから何かの経済的な活動に結び付いていく。それが今回の場合だと5年だったり10年だったりするんですけれども、その期間お手伝いをすることによって、環境もまたいろいろ改善するであろうし、制度的なものも整っていくでしょうから、今できることをまずやってみる。そういうところで、このサイクルの中でその地域で止まっているところから再度動かしていきたいということでございます。

杉浦 実際にこの森林保全に取り組んでいる事業に参加した社員の皆さんの感想はどのように聞いていらっしゃいますか。

篠原 私も毎回春の植林、秋の下草刈り、つい先日も間伐に行って参ったんですけれども、帰るときには非常にみんな、顔が明るくなって元気になっています。

われわれの取り組みの特徴として、社員だけがボランティアで行くのではなくて、地元の方と一緒にやりたいということで、当然指導にプロの方に付いていただくんですけれども、それ以外に地元の方に参加していただいて。大体社員と同数ぐらいの方にいろいろなかたちでお手伝いをしていただいて、交流も、そこの地方の文化なり、お昼には地元の名物の、例えば和歌山ですとめはり寿司とか高知ですと皿鉢のちょっとしたものを作っていただいて一緒に食べて

、その中で地域の食文化にも触れていただくというようなイベント……。これは年に1、2回の話ですので、それ以外の作業はいっぱいあるんですけども、やはりお祭りのなものというのは農作業に必要ですから、そういうところで社員も行く時期に地元の方と一緒にコラボレーションで何かイベント的なものを作っていくという取り組みをしております。

杉浦 ありがとうございます。高知、和歌山両県の取り組み、そして企業の取り組みをお伝えしました。両県の提言にもありますように、森作りにおいて企業に対する期待がとても大きいということが分かりましたよね。宮林さんと稲本さん、その点についてはどういうふうに感じていらっしゃいますか。

宮林 企業の皆さんが参画していただくということについて、われわれはCSRという言い方をよくしているんですけども、それについてはやはり企業ベースの話があるのかなという感じを受けます。けれども、事この森林整備につきましても、やはり環境貢献というよりは地域貢献というような……。森林そのものにはストーリーがあって文化がありますので、こういったストーリー性とか文化性をうまく企業も参画して、地域活性を進めていくというような非常に大きな目標があって、それにうまくはまり込んでいく。言ってみれば、森林は先程の北野先生の話ではありませんけれども、世界共通の財産である、県民の財産である、地域の財産である、国民の財産であるという基本的なその財産をどう守っていくかといったときに、全体が参画していくようなそういう仕組みの中で、企業の役割がきちんと支援するというかたちで作り上がってきているのかなという感じを受けました。

杉浦 はい。稲本さん。

稲本 やはり企業は、少しでも自分がCSR、要するによくやっているとアピールしたいわけです。だから、僕はアピールするような活動と、もう一つは実質的に本当に森を作る。実質的に森を作って、しかも森も針葉樹林と広葉樹林はそれぞれやり方が違うんだよとプロとしてやる。それが今正直言って多少ごっちゃになっているんです。しょうがないんですよ、初めだから。だから、ごっちゃになっているんですけども、それを整理していかなければいけない。

僕はいずれにしても、橋本さんとかがやっていたら一つのモデル作りだと思うんです。日本は今企業も行政も市民も一緒になってできたという成功モデルを一つ作らないと。

僕はドイツに行ったりすると、ドイツ人は理屈で分かるとちゃんとやるんです。ところが日本人は、「理屈では分かりますけどね」と言ったらやらないということなんです。ドイツでそんなことを言ったら馬鹿だと言われますよ。理屈で分かってやらないのは馬鹿かうそつきなんです。要するに、シュバルツバルトの森とかあちらではちゃんと成功しているんです。シュバルツバルトの森といったら黒い森と言うんですけども、今黒くないです。ドイツトウヒとかああいいう黒いのと、ちゃんとブナとかナラとかを入れた黄緑のとまだらになっているんです。

そういうふうには、やはり日本の場合もドイツ人のように理論でいかないから一つのモデルを作る。企業、行政、市民が一体になったモデルを作る。それからうまくやれば日本人はわーっとみんなで作りますから。杉の木もこんなにたくさん植えた。森林の40パーセント以上に木を植えた民族は世界にも珍しいです。おかしいんじゃないかと世界から言われているぐらい。それでみんな花粉症になってとか、それでいてなおかつ外国から木を買って、変な国民だと世界から言われているわけです。

だからこれはちゃんと乗れば、これもいいモデルができればどんどん広がるんじゃないか。そんな意味でぜひ頑張ってもらいたいと思います。

杉浦 森林保全の話を進めていきますと、結局はだれが費用を負担し、そしてだれが汗をかくのかということに話がいくと思うんですけども、稲本さんはどう考えますか。

稲本 やはり最終的には国民全体なんです。税金といってももともとは国民のものですからね。企業も一方ではそれぞれある市民なわけです。そういうかたちで、本来で言うとやはりNPOとか市民団体がもっともっと強くならなければいけない。世界的に言うと、やはり大きいNPOはいっぱいあって、数百億とかのレベルで動いているところがあるんです、エンザブルエフとか何とかね。ところが日本のNPOはものすごく小さい。それを今企業とか行政でかかわってあるかたちにしようと思うのは、僕はいいことだと思います。

だけど、やはりNPO、NGOがもっと強くなって、団塊の世代の人たちもどんどん出てくるわけですから、それが要するに公費も使うし自分のお金も使うし、企業はCSRでも使う。その三つをうまくコラボレーションすることが重要ではないかと思っています。

杉浦 宮林さんは。

宮林 20世紀型の経済構造そのものが、生産力を中心として展開したわけですけども、21世紀環境の世代というふうを迎えたときに、やはり安全というキーワードが一つあるかと思うんです。これはやはり生活にしる、健康にしる、学校教育、いろいろなものがあると思うんですけども、その安全をキーワードとしたときに、だれがどう安全を作り上げるかといったら、これはやはり安全持続的会社だと思えるんです。この社会をどう作るかといったらコラボレーション、つまり連携とか皆さんが参画するということになるか。この参画するといったらときに、企業、住民、行政、あらゆるものが参画した参加型社会というような、そういう新しい社会を作り上げていくような時代を21世紀は見ているのではないか。

ということになると、稲本さんと全く同じなわけですけども、それぞれの役割をきちんとしながら全員が参画していく、その中の企業の役割あるいは地域の役割、そして住民の役割、行政の役割といったのが出てくるのではないかというふうに思っています。

杉浦 お話を聞いていますと、市民、企業、行政の連携が何より大切ということなんですけども、先程も成功モデルを一生懸命作っているのではないか

というお話もありました。和歌山県、高知県それぞれに、その連携の仕組みを今作っていらっしゃるのでしょうか。どうでしょう。

橋本 先程お話ししたことを少しストーリーとして結び付けて言えば、森林環境税のソフトの事業として、もう一つボランティアを育成するという仕事があります。森林環境税が導入される前は、県内には三つほどしか森林ボランティアの団体がありませんでしたし、活動も散発的というと一生懸命にやってくださった方に申し訳ないのですけれども、現実の問題としては散発的でした。

この森林環境税ができて、現在森林ボランティアの団体が25団体に増えていきますし、800人ほどの方々が、全くの素人ではないある程度の知識とノウハウを持たれたグループとして存在をしています。そういう方々がいらっしゃるので、篠原さんの企業とかいろいろな企業が協働の森として来ていただくときに、そこで一緒に、例えば企業の職員の方が体験研修をしていくというときにそのプログラムを作る、またそのお手伝いをするということをボランティアの方がやってくださっていくということになります。もちろん森林組合の方もやってくれますけれども、そうやってボランティアに広がりが出てくる。そのことによって、企業の皆さん方も来やすくなるという流れが一つあると思います。

ただもう一つ、私がボランティアという意味で仕組み作りでお願いをしたいというのは、全国的に活動をしているボランティアの皆さん方に連携をしてもらいたいということなんです。というのは、企業にお話に行きますと、先程植林と間伐という話がありました。植林は割と分かりやすいんですけども間伐が分かりにくいということが一つの壁としてあります。もう一つの壁は、「高知に工場も持っていないのに、なぜうちの企業が高知でそういう活動をしなければいけないの」「これ地球温暖化のことですから、別に高知だけ、日本だけじゃないんですよ」とそれこそ理屈を言ってもなかなか動いてはくさいません。

そういうことから言いますと、全国的に活動されるNPOの方が仲介役というかお見合いの役割を果たしてくだされば、「それは高知だけでも、これは全国でこういう活動をしている、そういう団体の人たちが次の目標として高知を挙げてくれたんだ」というふうに、企業の中でも社内での説明もしやすい。それからステークホルダーというか株主なりお取引先なりにも説明がしやすくなるというようなことで、やはり地元で活躍してくださる接着剤としてのNPO、それから企業と結んでいく全国的な活動をしていらっしゃるNPO。この活動というのは、その接着剂的な仕組み作りという意味ではとても大切だと、そういう仕組みもぜひ作っていききたいというふうに思っています。

杉浦 中野さん、和歌山県としましては、行政と企業と市民の連携をどういうふうに考えていらっしゃいますか。

中野 森林保全活動をするというのは、もちろんお金も要りますけれども、やはり相当の労力、手間ひまがけっこう掛かります。そのときに、やはりわれわれが今現在和歌山県でやっているシステムは、県が窓口になって企業さんのほうと地元あるいはボランティア団体等の連携をうまくスムーズ・・・。

中野 …… 広がりを持っていくには相当手間ひま掛かるはずですので、そういう意味ではそういう取っ掛かりになるようなことも可能かなというふうに思います。

杉浦 はい。両県の取り組みをご紹介して参りましたけれども、両県が進めている施策は全国にも広がりを見せているんです。例えば森に行けない人でも森作りにかかわれる仕組み、森林環境税ですけれども、去年までに導入した県は岡山、島根、鳥取、鹿児島など15県に及んでいます。そういう広がりもだんだん見えてきたということですね。

さて、実は森林保全には極めて差し迫った事情もあります。1997年の京都会議で地球温暖化の原因となる二酸化炭素の削減について重大な決定がなされまして、それぞれの国が義務を負うことになったんです。映像レポートにまとめましたのでご覧ください。

～京都議定書の解説と点検～

V T R 上映（京都議定書とは）

杉浦 今のV T Rのおさらいを少ししますと、日本の削減目標6パーセントのうち森林に割り振られた3.9パーセントの二酸化炭素を削減するためには、何と日本の森林面積の7割を整備しなければならないんです。しかもそれは1990年以降、新たに整備された森林しかカウントされないんです。そんなことが実現できるのでしょうか。宮林さん、そもそも整備し直すというのはどういうふうにするのですか。

宮林 はい。先程もパネルに出ていましたけれども、森林というのは「植えて、育てて、切って、利用して、また植える」という循環があるんです。この循環を絶え間なくやっていくことが基本的に整備に重要なことなんです。今その段階で植林と間伐が完全に切れておりますので、この循環をしない限りにはCO₂の固定量も森林の多様な機能も下がってしまうということになりますので、この循環をいかにうまくつないでいくかということが整備の大きな課題であろうというふうに思います。

杉浦 森林全体の7割の森を整備し直す。これはできますか。

宮林 これは非常に難しいところなんですけれども、しかしやらなければいけませんよね。全国に先駆けて京都という……。日本そのものが公害というものをきちんとやった国でありますし、そういう中では責任を持って環境問題には取り組んでいかないといけないし、ましてや京都の中で決まった問題ですので責任を持って約束を果たしていけないといけないだろうと思います。ただ6パーセント削減と言っても、1990年ベースにしますとCO₂の排出量が大幅増えているみたいですので、この点についてはもうちょっと別のところで議論していけないといかんと思っていますけれども、何とか……。

杉浦 そうなんです。

宮林 ええ。何とか実現するべく努力しなければいけないということではないでしょうか。

杉浦 削減目標の6パーセントと申し上げましたけれども、それは京都會議での時点でのお話なんです。その後、日本のCO₂の排出量は増えてしまっていて、更に削減目標も増えてしまっているそうです。数値的には相当なパーセンテージになっているんですよ。

宮林 ええ。そうだと思います。きちんとした数字はなかなか言い切れませんが、既に6パーセントの段階では14パーセントぐらいを削減しないとどうも間に合わないというような結果もございます。そうなってくると企業ベースとか事業所ベースではある程度削減はできているんですけども、基本的に問題なのは一般家庭、ないしは一般の生活といったところで具体的に環境を考えていかないといけない。そういう意味でも森林というものをテーマに環境をきちんと議論していくことが、そういうものに近付いていく一つの大きな一歩になっていくのではないと考えますけれども、大変厳しい状況にあることは事実です。

杉浦 状況は悪くなっているんですけども、とりあえず森林ということ言えば、森林面積の7割を整備し直すという目標は引き続きあるということですね。

宮林 そうですね。これはきちんとやっていかないといけない。

杉浦 稲本さん、これは目標達成はどうでしょう。どうしたら達成できますか。

稲本 今まで通りだとできないのははっきりしているんです、このままですと。だから、一種の革命的な方法をやらないといけない。ただ森林というのは誤解されている人がいるんですけども、切ってもCO₂は出るわけじゃないんですよ。燃やして初めてCO₂は出るんです。そこをちょっと勘違いしている人がいて、切ってしまったらもうCO₂も出ちゃうんじゃないかと。山に放置して腐らせたり、燃やしたりしちゃ駄目なんです。ちゃんと持ってきて、こういう家具にしたり、この建物全部木造だったらもっといいんですけども、そういうものにしたりする。今小学校などは木造にしようとかいろいろな公共の建物を木造にしようとか、友人の建築家は随分やっています。ですから住宅も含めて、木を何にしる使う。使って長もちさせる。これは使う・・・。

杉浦 使い続けることが大事なんですよね。

稲本 そうそう、まず。そうすると、山から出てきたものは町に固定されるわけで、一方で切った分を植える。そうするとどうなるかという削減と吸収が同時に起きるわけですよ。木でやることによって、例えばコンピューターだって何だって木でできるんです。うちはスピーカーも作ったし、いろいろなもの作ったの。何だってできるの。プラスチックでできるものは、全部木でできるんです。

そういうふうに木で作って、一方でその分植えて、その木が大きくなるとい

うことは吸収するわけですから。だから削減と吸収が2倍に効いてきちゃう。そうすると可能性がないことはないんで、そのことをみんなが理解して、このあと団塊の世代とかけっこう余裕ある人たちが、大体団塊の世代が600万人と言われているんですけども、その人たちがもし全員で杉を100本植えれば、それだけで相当の量になりますし、いわゆる「100万人のキャンドルナイト」という運動があったんです。「ちょっとでも電気消しましょう」というの。これは何と700万人になりつつあるの。だからある運動がなってくると、日本はけっこうわっと増えるんですよ。何かそういう、ぼんぼんぼんぼん、倍々倍になるような運動を起こさないと駄目じゃないかなと気がしているんです。

杉浦 全員参加型で取り組むと。

稲本 そうそう。

杉浦 ただ、人工林のスマートな立ち木をイメージしますと、そんなものよりも手付かずの巨樹、巨木のほうがもっとたくさんCO₂を吸収して酸素を出してくれるのではないかと、そういうイメージがあるんですけども。宮林さん、人口林で大丈夫なんでしょうか。

宮林 先程からパネルが出ているみたいですけども。樹齢によってCO₂の固定量ないしは酸素の排出量、吸収固定量というのが変わってきますので、若い木ほどたくさん吸収固定してくれる。ある程度60年から80年ぐらいになってきますと、酸素とCO₂の排出と吸収がとんとんになってしまう。いうことになると、できるだけ木材を使って木材としてたくさん利用していけば、そこにCO₂が固定されます。新しく植林していくとだんだん固定量が増えてくる。ということで、うまくやっていけば、稲本さんが言っているように、かなりの部分で吸収固定が可能になってくるということだと思います。

杉浦 木は生きていくうえでCO₂も出すわけですか。

宮林 そうですね、夜・・・。

杉浦 光合成で・・・。

宮林 光合成の中では・・・。

杉浦 光合成ではCO₂を吸収して酸素を出しますよね。

宮林 はい。夜、呼吸をするときにCO₂を彼らも出しますのです。

杉浦 やはり呼吸するときにはCO₂出すんですか。

宮林 そうなんですね。

杉浦 なるほど。

稲本 もし、もっと木が動いたりしたらもっともっとCO₂を出すんですけども、彼らはじっと止まっていて、どちらかというと吸収が多いということなんですよ。

宮林 運動しません。

稲本 要するに、人間や動物のために彼らは一生懸命に自分のエネルギーを抑えてくれているのね。その意味では僕らは木に感謝しないといけないんだよね。

杉浦 だから温暖化ガス削減という面では、日本の森林の4割を占める人工

林の整備から始めるのが一番手っ取り早く、大切なことだということなんですね。

宮林 はい、そうです。

杉浦 はい。ここまでは森林の再生による二酸化炭素削減について話し合ってきましたけれども、二酸化炭素削減についてももう少し広げて考えてみたいと思います。篠原さんのところでも、企業としまして積極的に省エネに取り組んでいらっしゃるんですね。

篠原 はい。会社としては当然なんですけれども、企業活動していますとどうしても環境に負荷を掛けている。われわれも、私の所属している会社だけではなくグループ会社がありますので、グループ全部でグループの環境行動計画というのを中期計画を作りまして、2008年までに例えばCO₂を何パーセント削減しようとか、水を何パーセント削減しようとかリサイクル率を、工場などでゼロエミッションと申しまして、100パーセント、熱量も含めましてそういうのをやろうとか。要するにものを使わなければエネルギーも少なくて済むし、エネルギーの効率的な利用をすれば、全体のCO₂の排出も少なくなる。そういうことでこの10年間で約30パーセント、単体ですけれどもCO₂の排出原を削減してきました。

ただ、マイナス面をどうやって少なくするかとって、社員に対して「昼休みは消灯しなさい、紙を使うのを少なくしなさい」。これは頭で分かっているけれども先程の稲本さんの話ではないけれども、「でも」とか行動に結び付かない。一番手っ取り早いのが、やはり社員を今回の植林とか森林保全活動、山に連れて行くと、自分で植えて、それで植えた木が秋になったらどうなっているかを知りたいから草刈りに行きたい。そういうことで自然に対して関心を持つわけですね。そうすると、日ごろ会社で環境面で行動目標とかを持っていますけれども、それが実際自分の頭で考えられるようになって、それを具現化できるということです。

先程から話がありますけれども、やはり成功例だったり何か価値を分かった途端に人間の行動は変わるのではないか。そういうきっかけになればということで、単に企業としてのマイナスを少なくすることも、当然これは活動し続けなくてはいけない話なんですけれども、プラス面、そういう意味で植林とか森林活動をやって、社員もそこにできるだけ参加してもらおうという活動を続けているということです。

杉浦 中野さん、和歌山県としてもこうした企業の意識、行動力に期待していらっしゃるということですね。

中野 はい。いずれにしても、そういう企業の森に来られた若い方々が山の中でほんまに楽しそうに大雨の中でもやっているんですわ。雨でぼとぼとぬれながら楽しそうにやっているというのが、何か私らから見たら、すごく逆に新鮮な感じがしてね、すごくありがたい、いいなあっていう感じしてます。

杉浦 森林での作業は危険も伴いますけれども、その辺り気を付けることもありますね。

稲本 うちには25年も広葉樹を主体に、針葉樹も植えているんですけども、やはりそれぞれの役目があると思うんです。子供でもできること。ドングリ拾いをやっているんですけども、これは子供でも拾えるわけです。植林も意外とだれでもできるんです。ところが除間伐とか主伐と言って大きい木を切るとなるとほとんどプロしかできない。ただうちはNPOとして25年もやっていますから、ほとんど25年やっている人はプロですよ、二十何年もやればね。そういうプロレベルの人ともものすごく始めたばかりの人、その人たちに合った仕事をやらなきゃ。そのための安全管理とか全部体制を整えなければいけないんですよね。

それと重要なのは、中野さんも言われましたけれども、楽しくなければ駄目なんです。楽しくなければ成功しない。うちがやっているのは、例えばこれは畠山さんなどがやったんですけども、漁師の人たちが山へ来て木を植えているんですよ。それで川の水がミネラルが多いいい水になると、漁師が魚取れるわけだし、流木が流れていかないと漁師がいい仕事できるわけだ。それで、山へ魚を持ってくるんですよ。山海汁というのを作って、それをお昼に食べながらやるのね。最近は漁師の人たちは朝早く来て、朝市をやってくれるんですよ。直接持ってくるから安くておいしい魚が手に入る。やっぱりそういう何か経済効果とか楽しみを一緒にしながらやっていって、なおかつ安全管理もする。そういうことが必要だと思いますね。

杉浦 楽しみながら森林保全をする、それが長続きのこつだと思うんです。京都議定書にもう一度話を戻しますけれども、京都議定書の約束達成のためのCO2削減というのは、先程から申し上げているように、具体的な量と方法と期限。2008年から2012年の5年間で達成することに決まっているんですけども、その実行プランということになりますと、私たち一般にはなかなか具体的に見えてこない部分があるんです。その辺りをどういうふうに分かりやすく、みんなで、全員参加でやっていこうという方向に持っていったらいいのか。宮林さん、何かアドバイスがありますか。

宮林 これは一般の皆さんということになりますと大変難しいんです。ただ、今稲本さんがおっしゃったように、いろいろなかたちで山にかかわっているNPOの皆さんだとか、あるいは企業の皆さんだとかという皆さんが出てきておりますので、こういったところに議論の場所をもう一つ上のランク、つまり環境を守るために森林を守るということは一体どういうことなのかという議論を深めていく必要があるのかな。

ちょっと日本の森林の保全の状況を見ますと、昔から保護林制度だとか保安林制度だとかいろんな制度をきちんと作りつつ展開してきております。そういう中を考えますと、現代のCO2を固定していく保全制度というのは一体何なのかというところをきちんと議論していく必要があるのかなと。

そういったものを踏まえながら、ボランティア活動だとか協働の森だとか、まさに協働の森というのはお互いに働くということで、これは地域社会にとっては共同体的意味が相当あったものだと思うんです。そういったものをうまく

復活させるには、みんなの環境をみんなで作り上げていくという議論の中に環境キーワードをきちんと入れた議論をしていく必要があるのかなと思います。

もう一つ、日常生活の中で空気だとか水も買う、健康も買うようになりまして、環境も少し買う時代に来ているのかなと。そういう意識構造の転換をする必要があるのかなという感じを受けました。

杉浦 橋本さん。先程CO₂吸収証書の話もありましたね。この辺りうまく利用していくということもできるんでしょうか。

橋本 そうですね。京都議定書の関係で言うと、一つは環境面。環境面でのことはCO₂の吸収証書だとかそれから削減証書というようなかたちで排出権につなげていくという方向だと思いますし、もう一つはやはり経済林としてもう一度森林を見直すということも必要な視点だと思うんです。というのは、かなり世界の木材の価格の動向というのが、潮の変わり目に来ているのではないかということを感じます。

中国だとか中近東での木材需要というのはものすごく急速に伸びていますし、ユーロ高だとか原油高だとかいろんな事情があって、海外から入ってくる木材の価格がどんどん上がってきております。そのために、価格が下がった分、国内の木材の競争力が非常に高まってきていますので、今こそきちんとした供給、流通のルートをもう一度組み直していく。そういうことによって国産材がビジネスとして経済材として使われる時代になってきているのではないかと。

私たち県の立場から言っても、それに備えた例えば作業道とか林道だとかそういうことがきちんとできて、物流のためにお金があまりかからずにきちんと木材工場まで運べて、製材できてということができれば、じゅうぶん競争力を持ってきた。このことも今日の主要テーマとはちょっとはずれるんですけども忘れてはならないことではないかと思うんです。

もう一つがその環境の面で、先程申し上げましたようなCO₂の吸収証書のことでもう少し広げていければなということを感じるんです。というのは、排出権という難しい言葉が出てきましたけれども、要は地球温暖化に効果がある、悪い意味での効果がある炭酸ガスだとかフロンガスだとかいう温室効果ガスというものをどう減らすかということで、現在空気中にあるものをどこかに閉じ込めて減らすやり方と、今のいろいろな生産の仕組みの中では、自然に出てきているものの量を減らすという、2通りの方法があるわけです。

今日お話をしている森林の面は、まさに空気中にあるものを閉じ込めていく。その閉じ込める吸収の量をひとつ炭酸ガスの吸収量として認めていきたいと思います。それできちんと制度化していきましようということを申し上げていて、このことも非常に宮林先生が言われたようにいろいろな難しい課題があるんです。あるんですけども、稲本さんも言われたように「何か難しい課題があるね」と言って「理屈じゃ分かるけど」とやっていたのでは事は進まないと思いますので、ぜひ国、それから企業の動向も関係しますけれども、今、一緒になってこういうことを考えていかなければいけない時期ではないか。

ですから、経済としてもう一度森林を見直すということと、もう一方で環境

としての森林の使い方、CO₂とのかかわりでの使い方というものをもう少しきちんと制度化していく、そのためのいろいろな土台作り、雰囲気作りというものを高知県や和歌山県の取り組みの中で全国に広げていければなというふうに思います。

稲本 今のちょっとあれで、橋本さんが言われたように、本当に、今環境問題は行政の縦割りとか地方と中央という今までの関係にある程度変えないと問題は解決しないんです。だからいかに総合的にやるかですからね。今すごく重要な話で。

もう一つは社会的常識として、例えばアルミのテーブルと木のテーブルがあると、アルミのテーブルはCO₂を70倍ぐらい出すの。要するに金属のものをを使うのと木のものを使う。金属のものはみんな千何百度で溶かすわけでしょう。ものすごくCO₂使っちゃうわけです。木のものだったら常温できちゃうから、大体7、80倍から100倍ぐらいは金属でできたものはCO₂を出しているわけです。そういう社会的な常識をまず広める。これは環境教育ですよ。それはいかに削減するかということです。一方で吸収も一緒にしなきゃいけない。僕は一番いい運動は、削減するためになるべく日本の国産材のものを使う。海外から持ってきたものは駄目なんです。これはウッドマイレージといって、太平洋を渡ってくるだけでCO₂をいっぱい使っていますからね。

杉浦 船の燃料とか。

稲本 そうそう。大体最近北欧から買っているんですよ。北欧から買うって大変なことでしょ。何にしろ、やはり日本の材を使って、それを買ってもらった人が、僕は今グリーンアンドグリーンという運動をしているんですけども、少しでも買った人がもう1割ぐらい上乗せするんですよ。それを植林とか育林に回す。グリーンコンシューマーと言われますよね。環境にいいものを買った人がさらにもう1割、環境にいいことに寄付する。何かそういう運動をやるといいんじゃないかなという気がしているんです。

～森林再生のために私たちができること

「木をつかう」～

杉浦 ありがとうございます。木の使い方というお話が出ましたので、今日最後の議論と致しまして、「森林再生のために私たちができること」としまして、国産の木を使うということについて考えてみたいと思います。宮林さん、そもそもこれだけ周りに森林があふれている国であるのに外国から持ってくる。高い燃料費を使ってCO₂をまき散らして外国の木を買っているという。これは変な話ですよ。

宮林 はい。もともとCO₂の固定にしましても、私たち人間は大体1年間に炭素量にしまして300キログラムぐらいのCO₂を吐き出しているわけです。

。それがどれぐらいの木材に固定吸収されるかという、電柱ぐらいの柱です。丸太に大体23本から30本ぐらいに吸収固定されると言われているわけです。そういうことを考えますと、大体今年では自給率が20パーセントを超すそうだという話もありますけれども、実は大半は外国からの材を使っているということになれば、外国の皆さんが吐き出している材をわれわれが使っていることになり、これは循環的に少し変だ。ということになると、やっぱり国産材をきちんと使っていくことのほうがはるかに環境貢献になる、循環型になると考えられるわけだと思ふのです。

そういう中で例えばプランター、間伐材等で使いましたこのぐらいのプランターを全員、国民1人が1個ずつ使っていけば、大体国民1人の木材需要量というのは1立方なんです。1メートル×1メートル×1メートル。それでプランターを計算しますと、大体20センチ四方の中に入っちゃうのかな。そうすると、国民の皆さんが自分のベランダに持ってくるプランターを、カバーでもいいんですけれども、それを間伐材で使っていただければ2割は木材需要量が増えるという。単純な計算をするとですね。というように日常生活の中で何か使っていただけるような工夫をしてもらう。あるいは小・中学校のテーブルとか椅子は少なくとも木を使うとか、そういうかたちを取っていただければ、かなり需要量は国産材で賄っていけるのかなという感じがしました。

杉浦 篠原さん。お宅で身近な所にどのぐらい木の製品がありますか。

篠原 たまたま3年ぐらい前に家を建てたんですけれども、東京ですから狭い土地に3階建ての木造になるわけです。

仕事で、要するに森林で流木で、先程国産材が6分の1以下と。それで経済林として成り立たないというのを片一方で知りながら、一消費者でそういう家を買うとか、例えばテーブルでも買いに行くと「やっぱり高いな」と。それで、こちらのもを買う。結果的に多分私が出ているもので国産材のものというのはないのではないかと、一般の消費者として。だからそこが、片一方で聞いていることと実際の自分の生活の環境周りであることとか、たいぶギャップがあるという感じはするわけです。

杉浦 外国の木よりも国産材のほうがお値段が高いんじゃないかと、そういうイメージはどうしてもありますよね。

宮林 どうしてもそういう誤解を持ってしまう。

杉浦 でも、「誤解である」ということはそうではないんですか、現実には。

稲本 日本の杉は米杉より安くなっているんです。それから先程橋本さんが言われていましたけれど、中国は日本の杉を輸入し始めているんです。それはもう日本の杉のほうが・・・。ひょっとしたら日本の杉は世界一安くなると言っていたんじゃないかな。

宮林 今、基本的には世界一安くていい材は日本の杉と言っていいんじゃないですかね。

稲本 だからちょっと前の情報が入っちゃっているわけですよ。今の情報じゃないのね。

杉浦 ということは、日本の林業は経済活動として成り立つんですか。

宮林 本来的には成り立つはずなんですけれども、成り立つ以下に価格が落ちているんです。ですから、本来ならば1立方メートル辺りの杉の価格というのは2万円ぐらいしていかないと農家の皆さんでペイはできないんです。それが今1立方4千円から3千円ぐらいに落ちていますから、こうなるとやるだけでマイナスになるという構造があるわけです。

杉浦 でも、そんなに安いんだったら、もっと私たち買おうという意欲がわいて売買が成り立ちそうな気がしますけれども。

宮林 だからそのところが、例えば外材流通のパイプが太くぼんとできておりますので、なかなか国産材の流通が入りにくい側面も実はあることはあるんです。

稲本 流通機構と製材所、要するに一連の流れを改革しないといけないわけです。問屋さんがいっぱいあって、問屋さんから問屋さんに行く間に手数料を正直言っていっぱい取っているわけですよ。

杉浦 高知県では地元の実態はどうなっていますか。

橋本 要は外国の木材より安くなっていく。そのことによって当然需要供給から言えば売れるということになっていくわけですね。ただ、売れてもその間にかかわっているいろいろなお仕事がいっぱいあって、それを配分したらみんなが食べていけないと、もうやっていけないということになるわけです。

ですから、そういう生産から流通に至るまでのサプライチェーンとよく言われますが、供給の鎖ですね。そういうものをきちんと整理をして、もうちょっと効率的に木材を出していける、供給できる体制というものがひとつ必要です。

それから行政の役割として言いました作業道だとか、そういうものをきちんとしてやることによって、木材の工場までその生の木が行くまでの物流コストを下げていく。そういう努力をすれば、もう既に価格的には競争力を持っているのでじゅうぶん成り立つ。まだ、ちょうどその潮の目が変わり始めたところで、そういう十分な流通のシステムだとかいうことが対応として整えられていない段階だと思うんです。

そのことと消費者の皆さん方に「もう現実的には安くなってきていますよ」と。質的にも環境的にも宮林先生の言われたような健康、よくシックホームということが言われますけれども、シックレスホームを造る。それにはやはり日本の木を使っていくことが一番いいことは目に見えていますので、そういう意味の啓発がまだまだじゅうぶん足りていない、というようなことが今重なっている時期で、この数年はそういう意味では大きな変化のときではないかと期待込めて言えば、そういう思いを持っています。

稲本 あと、要するに木でいろいろなものができるんです。うちは遊具とか木琴とかいろいろ作っているんですけどね。

杉浦 積み木もありますね。

稲本 積み木とかね。いろいろな木の積み木。それからスピーカーだってで

きるしエレクトロ需要・・・。テレビだってできちゃうんですよ。木というのは技術開発さえすればどんどんできちゃう。それから建物も、細い間伐材を使ってうちはあるドームを作ったんですけれども、間伐材使っていい建物ができるんですよ。

杉浦 間伐材で。

稲本 うん。間伐材と細い木をいろいろ組み合わせて。だから木の建築や木工というのは一時発達しなかったね。車産業とかエレクトロニクスが随分発達した割には。これは今だいぶ開発され始めましたから。

だから橋本さんが言われるように、サプライチェーンをやって、なおかつ木でいろいろなものを作っている人にも買ってもらう。そしてなおかつ現場も製材所や林業も結果的には活性化して、なおかつCO2も減るということに、今だからちょうど変わり目じゃないかなという気がするんですけどね。

杉浦 宮林さん、先程もお話がありましたけれども、更に木の良さをアピールしていただけますか。

宮林 そうですね。一つ例を申しますと、小学校の大きな事例があるんですけども、木造の、ここに出ていますね。木造校舎の問題とRC制度の校舎を比較しますと、これはインフルエンザで学級閉鎖した数なんですけれども、はるかに木造校舎のほうが閉鎖率が低い。あるいはこのほかにも子供たちのけがです。けがをどれぐらいの率でしているかを見ると、はるかに木造のほうが低いわけなんです。

それからもう一つはマウスを使った実験によりますと、これは日本木材学界の中にありますけれども、やはり鉄筋のやつと木造のやつに住んでもらうと、片方が僕みたいにくるくると太っていくらしいんですね。片方は健全な健康状態になっている。つまり木造のほうがストレスがたまらなくて健康的だというような結果も出ているわけで、寿命も木造のほうが長い。ということになると、やはり木材というのは私たちの生活あるいは健康に非常にマッチングした材である。だから日本人は古くから木の文化をきちんと作り上げてこんにちまで来ているのかなと。これはやはり、そこをもう1回学び直していく必要があるのかなと思いますね。

杉浦 ちなみにこの中で木造校舎で学んだ経験のある方。

稲本 学びましたよ、僕は****。(笑い)

杉浦 皆さん、そうですか。それぞれにいい思い出がありますでしょうか。ありがとうございます。今日のフォーラムで国産の木を使うことが環境を守ることにつながる、森林保全につながるという考え方が分かりました。まだまだ議論も尽きないんですけれども、時間も少なくなりましたので、最後にお一人ずつ付け加えたいことがありましたら教えてください。じゃ、こちらから行きましょうか。稲本さん。

稲本 今ロハスというライフスタイル・オブ・ヘルス・アンド・サステナビリティ、要するに健康で環境にいい生き方。これは当たり前なんだけれどもね。それが都会の人は特にいいと言っているんですけれども、そのロハスの健

康と環境にいい生き方の一番の柱は、僕は木だと思うんです。先程も言ったように、木でいいものを作って豊かな暮らしをしつつ、植林を一生懸命したり、育林をしたり、それで循環をさせるようにすれば・・・。

最後に日本の最大の資源は何かと考えてほしいんです。実を言うと最大の資源は水なんですよ、世界的に見て。その次が森林木材、森林と木材なんです。これだけ小さい国で、国土の7割近くが森林で、しかもそこに今膨大な蓄積量がある。これは最大の資源で石油もなければ鉄もない国が最大の資源が木だということをもう1回認識して、それをどう使い、どう育てるか考えてほしいなと思います。

杉浦 ありがとうございます。

宮林 木材を使うことを基本的には森林を守るというふうにつなげていくわけですがけれども、私はその次に、やはり地域の中にきちんとした林業、農業が培われていくことが重要ではないか。つまり交流にしても、それからいろいろな環境材を作るにしても、ボランティアの皆さんも確かに重要な側面を持っていらっしゃるんです。それは認めますけれども、非常に急傾斜なところに入りますと、これはやはりある程度プロの皆さんのお力を借りないとというか、そこでないとできないわけです。

そういうことを考えますと、環境材を守るときの基本は林業、農業、そういったものがきちんとして培われている世界、社会ではないかなと感じるわけです。そういう中で一番投資の大きな力を持っているのが地域行政だろうと。それはいかに、どういうふうに投資効果を持つかということがこれから大きな課題になってくる。それは僕はトータルとして環境を含んだトータルとして大きく地域作りというようなどころにかかわってくるのかなという感じを受けています。

杉浦 はい。ありがとうございます。

篠原 植林とか森林保全活動を通じて現場に行った人間は、先程言いましたけれども、社員も顔が元気になってきている。それから地元の人も山を守る大切さというのを再認識されたように感じます。企業にやれることというのは限界があるわけですがけれども、できる範囲で今度とも植林、森林保全活動に積極的にかかわっていきたいと思っております。

杉浦 はい。橋本さん。

橋本 ぜひ何か木の製品を買われるというときに、どこでできたものか、どこから来たものかということに気になっていただきたいと思います。今日も外国から届いた木材はそれを運ぶためにも随分炭酸ガスも出しているし、水も運んできているし、いろいろな課題があるというお話がありました。やはり身近な木を使っていくということは、今日のテーマでございます炭酸ガスとか水という面でも、みんなにとっていいことではないかなということから、どこで採れた木だろうということにぜひ気になっていただきたい。

またF S Cというふうな、持続可能な森林経営をしている森林かどうかということを確認する制度がいくつかあります。こういうような持続可能な森林認

証を受けた木材かどうか、そんなことをぜひいろいろ木を手にとられる、またおうちを作られるというときに気にしていただくと随分違うのではないかなということをおもいます。

それから国全体ということだと、国、企業そして国民の皆さんとこういうようなかかわりがあるわけですが、小泉前首相が医療保険の改革の時に三方一両損ということをおっしゃいました。損ではないですが、国民も例えば薄く広く税金を負担する。また国も今の制度を改めて、難しいけれども仕組みを作っていく。企業の皆さんにも海外だけではなくて国内の森林整備にもというふうに、何か一歩踏み込んでいただくことが、これは一見損に見えますけれども、やがて三方一両得つなっていくのではないかと。そういうような循環性を持った森林というのがテーマではないかということをおもっています。

宮林先生がおっしゃったように、やはりそれを実際にその地域でやっていく地方行政として、ぜひ林（りん）だけでなく農とも一体となって地域作りということをおもう一度見直してみたいなとおもいました。

杉浦 中野さんは、まとめをいただく前に「木を使おう」ということに関してはどうおっしゃるのか。これはきっと行政の後押しになると思うんですけども。

中野 はい。やはり木を一人一人の方に使っていただくことが結局森林整備につながることで、最後の目標かなというふうに思います。今橋本知事がおっしゃられた通りで、皆さん方に木を使っていただきたい。たとえ少しでも国産材を使っていただきたい。特に紀州材を使っていただきたい。と同時にやはりその生い立ちですね。どこでどのようにして育ったか、育てられたかという思いを持っていただきたい。それがもう今、ここで今日は議論されたことが考えていただければ全部含まれてくると思いますので。

ほいでももちろんわれわれも、和歌山県もそういう緑の雇用で育った若いやる気のある力を借りながら、林業の再生、林業で何とかいけるというものを作っていく必要がありますので、それはそれで頑張ります。だから要するに使うと、当地の人に使うと、われわれも努力するというようなかたちで何とか森林、林業を守っていきたいというふうに考えています。

杉浦 はい。食品だけではなくて、木材もトレーサビリティを表示するような時代が来るのでしょうか。最後に付け加えることはありませんか。中野さん、よろしいですか。では宮林さん。最後に本当に21世紀の環境、森林保全を考えると、もうこれまでとはちょっと違う新しい発想で臨まなきゃいけないという気が致しました。その点について一言お願いします。

宮林 大きなテーマとして21世紀は、先程おっしゃいますように環境の時代というものが入って参りました。この環境の時代ということをお考えすると、私たちは先祖からいろいろな環境をいただいて、それをうまく活用してこんにち来ていると思うんです。ただその活用の仕方をちょっとここで間違えてきたのが明らかになった。じゃあ次の世代にどんな環境をどうするかたちで残していったらいいかというのが、われわれがお考えなければいけない時代に来たなど。

とすれば今それぞれの時代、それぞれのところでやれることはいったい何なのかということをおれわれは考えて、そして木を使うことなり、水をきちんと使うことなり、そういった一つ一つの日常生活の中で環境を考えていくような、そういう社会作りが必要なのかなと思っております。

杉浦 ありがとうございます。季節が巡ってきますとおのずから美しい新緑や紅葉を見せて私たちの目を楽しませてくれる日本の森。これこそ日本の原風景だと感じている方も多いことでしょう。でも今日の議論の中で、そうした見方というのは、森の一面しか見ていないということに気付かされました。日本の森の4割は、人が大切に守り育ててきた人工林なんですね。日本人はそこに木を植えて育てて上手に利用する。そういう営みを繰り返すことによって、美しい国土をこんにちまでつないできたわけです。

今日お伝えしましたように、企業の森、協働の森など新しい試みによって森林保全も新しい一歩を踏み出しています。今回の議論が踏み台となりまして、森の再生が進むことを期待しています。皆さん、長時間にわたって本当にありがとうございました。ありがとうございました。（拍手）

テレビカメラで拍手をいただきたいので、皆様、そのまま拍手を続けてくださると嬉しいです。（拍手）ありがとうございます。OKです。ありがとうございました。収録にもご協力いただいてすみませんでした。ありがとうございます。

藤岡 会場の皆さん、ご協力をありがとうございました。ご出席の皆さん、おつかれさまでございました。では、パネリストの皆様を拍手でお送り致しましょう。ありがとうございました。（拍手）会場の皆さん、長時間、改めておつかれさまでございました。ご協力をありがとうございました。「フォーラム『みどりのニッポン再生』地方からの提言」を終わります。これを持ちまして、今日のプログラムは全て終了致しました。先程ご紹介した森林の仕事ガイドンス、こちらはまだご案内しておりますので、お帰りの際にはどうぞお立ち寄りくださいませ。それでは足元にどうぞお気を付けてお帰りください。皆さん、どうもありがとうございました。